

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

9



第七十七卷 第九号 日本幼稚園協会

幼児教育カリキュラム作成の参考書

保育実技シリーズ

1. うたであそぼう

中村 明・早川史郎・関口 準共著
B5判 128頁 定価 1,000円

2. 幼児の体育あそび 1

マット・ボール編

三宅照子著
B5判 120頁 定価 1,000円

3. 幼児の体育あそび 2

なわ・平均台・とび箱編

三宅照子著
B5判 128頁 定価 1,000円

4. あたらしいあそび

幼児の安全能力を育てるために

幼児の安全保育研究会編著
B5判 132頁 定価 1,000円

5. 幼児のリズムあそび

フォークダンス・わらべうた編

日本フォークダンス連盟編
B5判 132頁 定価 1,000円

6. 幼児の体育あそび 3

鉄棒・フープ・トランポリン編

三宅照子・桑原芳子共著
B5判 112頁 定価 1,000円

7. ペープサート

山本駿次朗著
B5判 128頁 定価 1,000円

8. 幼児の造形あそび 1

春夏編

桜井俊夫著
B5判 128頁 定価 1,000円

9. 幼児の造形あそび 2

秋冬編

桜井俊夫著
B5判 128頁 定価 1,000円

10. みんなのあそび 12か月

うた・おどり・リズム編

上田順子著
B5判 128頁 定価 1,000円

11. リズムであそぼう

中村 明・早川史郎共著
B5判 128頁 定価 1,000円

12. 保育のための人形劇

山本駿次朗著
B5判 128頁 定価 1,000円

13. 幼児の体育あそび 4

プール・太鼓橋・雲梯編

三宅照子・桑原芳子共著
B5判 110頁 定価 1,000円

■既刊13巻

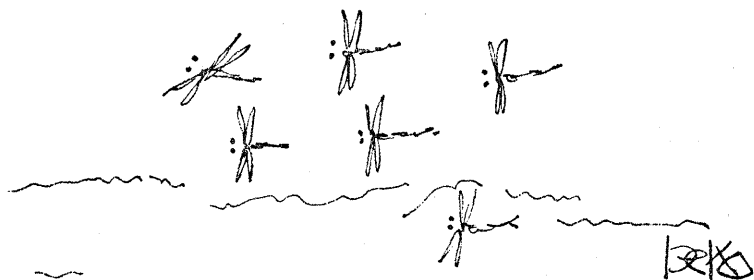


以下続刊

幼児の教育

第七十七卷 第九号





幼児の教育 目次

第七十七卷 九月号

表紙 梶山俊夫
カッ ト 中島英子

生活者としての子ども……………高橋さやか(4)

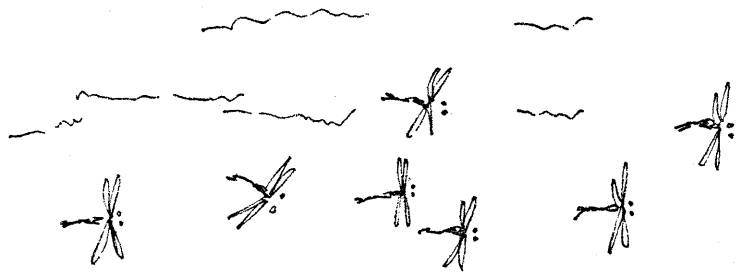
ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その一)……………海老沢敏(6)

私の幼児教育論……………玉井 収介(13)

クリちゃんの動物園散歩(一)……………根本 進(19)

幼児たちから学ぶかすかすのこと⑤……………丸山 ぶみ(22)



私の保育……………水野 恭子 (24)

乳幼児集団保育の問題点

——To Work or not to Work——……………黒田 実郎 (30)

集団保育の適齢期に関する研究……………横浜恵三子 (35)

Hちゃんの笑い……………本田 和子 (43)

子どもと共なる日々……………山本 秀子 (48)

★海外文献紹介……………津守 真 (52)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究—— (十九) ……津守 真 (56)

生活者としての子ども

高橋 さやか

子ども、特に就学前（即ち六歳未満）の子どもの教育を考へる場合に、今さらのように、遊びの重要性を主張しなければならぬような現実には、かなりしばしば遭遇するようにこのごろ感じている。

遊びとは、言うまでもなく、学習やしごとと一応は対立する概念の中に掌握されるものであるが、その本質は、要するに、活動の結果に目的がある（期待される成果をまつ）のではなく、活動の過程あるいは活動それ自体において目的達成が現前し、活動の動機にも、活動過程にも、興味と愉悅が実感されるものであると規定して支障はないと考えられる。学習やしごとは、活動が目的達成の手段であり行程であるが、遊びは、活動と目的達成とに間然するところがない。

このような遊びは、成年者におけるそれはしばらくおくとしても、未成年——とくに、六歳未満の人間においては、学

習の手段というよりも、まさしく、学習の成果——目標達成である、という現実の意味をもつ。

誕生以後、人間の子どもは、絶えず学習している。臍動と呼吸はほとんど学習する余地のない生理作用といえるかもしれないが、摂食をはじめとして、睡眠も排泄も学習要求されるいとなみであり、さらに、身体活動、感覚・知覚活動、情緒の発動——表現とその調整、意識や意志の発動とその調整、コミュニケーションのあり方、……すべて学習せざるを得ないものばかりである。このようにして、子どもの生活は、学習活動によってみだされている。

子どもにおいては、生活者であることは、不断の学習活動をつづけることによって成立している。学習であるから、その成果は、「能力の獲得」として達成を見ることになる。そして、子どもの遊びは、まぎれもなく獲得された能力の発動

であり、「発達」それ自体の実態以外の何ものでもない。

走れない子どもには、鬼ごっこや駆けっこはできない。ブランズ感覚の訓練がなければブランコもシーソーもすべり台も恐ろしいだけである。コミュニケーションのあり方を学んでいなければ、如何なるごっこ遊びも面白いはずがない。

子どもの生活は、遊びの生活だ、とは、かなり言い古されたことばである。言いはじめられたその時代には、——フレールベルが、母と子の遊びを重視し、恩物を発想し、そして労働作業を重んじたころには、子どもにおける生活即遊び、遊び即生活、という意味が、正確に把握されていたのではなかったか。

ルソー以後の汎愛学派の人びとの時代にはまだ、遊びは、子どもの自然を重んじた学習の手段である、というような発想が見られるようであるが、フレールベルにおいては、遊びは、子どもにおける生活活動の必然的形態、それも最も充実した形態である、という認識が明確である。しかし、案外に、フレールベルの後続者の大半が、再び、子どもにおける遊びの意義を見失ってしまったようである。

今日、意外に多くの教育者——それも教育学を専門とする

学者と名のつくような人びとが、真面目にひらき直って、「幼児に教えて、何故悪いか。教えないで放任することは、無責任かつエネルギーの浪費である」式の論法を展開されるのを見聞すると、つくづく……さあ、何と言おう、安手のタイムマシンにのせられて、一世紀半ばかり逆行する途中でエンストでも起されたような気分になる。教える——？ 教えようが教えまいが子どもは不断に学習せざるを得ない実在者であり、教えるということが、学習の必要を充足させる、という意味ならば、悪いどころか、教育者たるもの不断の配慮を怠ってはならない。それは、一つの生命が存在するや否や、教育のいとなみも存在するでなければならぬ。ただ、教材を生活活動にとり込まない形で、うけとらせようとすることは、生活者としての子どもを疎外する結果を招く。このことばかりは改めてきっぱり言い切っておきたいのである。満六歳に達する前後には、子どもは身辺生活においてはほぼ完全な独立者になる。ただし、そうなるためには、生れた時から生活者としての活動をつづけ経験を積まなければならぬのである。

(西南女学院短期大学)

ルソーの夢

—むすんでひらいて考— (その一)



海老沢 敏

一、《むすんでひらいて》とルソー

最初にまず二冊の書物の中から、それぞれ一節を引用させてい
ただこう。

一冊は、園部三郎著《音楽史の断章》（音楽文庫26）音楽之友
社、昭和二十七年）の冒頭に収められた（ジャン・ジャック・ル
ソーと音楽）の冒頭の文章である。

「読者諸君は次の歌をごぞんじだろう。

むすんでひらいて

手をうってむすんで

またひらいて手をうって

その手を上に

読者諸君はこの愛らしい童謡の一節をよむだけで、幼い心をよ
びかえし、そのかれんなメロディをおもいおこすことであらう。

しかし、この歌の作曲者が論文の主人公であるジャン・ジャーク・ルソーであることはほとんど知られていないだろう。彼が偉大な思想家であったことは誰一人しらぬ人はないが、彼が同時に作曲家であったことを知っている人はきわめて少いのではないだろうか。」(同書三ページ)

そして、もう一節は一九六二年(昭和三十七年)、すなわちルソー生誕二百五十年祝年に刊行された桑原武夫編《ルソー》(岩波新書43)岩波書店、昭和三十七年)から、その終章《世界への浸透》の最終節《不滅のジャン・ジャック》に見られる文章である。ちなみにこのルソー紹介を目的とした書物の目次の上部には《念結んでひらいて》の第一節の旋律が掲げられている。

「思想の影響ないし作用は、学者の世界においては固有名詞をとまなび行われるが、一般民衆の世界においては無記名で力づくよく浸透することがある。本書の『目次』に音譜をかかげた『結んでひらいて』の懐しく甘美なメロディ、明治以来それはいたるところの幼稚園で愛誦されているが、その作曲者がルソーであることを知らぬ子ども、いや先生も多いのである。しかも、そのメロディは子どもたちの心を楽しく美しくする。ルソーの思想についても同じことがいえるであろう。」(同書一八七ページ)

園部氏の音楽家ルソー論はすでに四十年以上も前の昭和十一年に《音楽評論》誌上において発表されたものであり、《音楽文庫》に収められるに先立って昭和二十三年に三一書房からおなじく《音楽史の断章》のタイトルの下に出版されている。

この二つの書物が指摘している重要なことは、《むすんでひらいて》の言葉や旋律を私たちが読んだり聴いたりした時、私たちの心の中に生起するはるかな想いであり、その意味である。《むすんでひらいて》という歌詞や《ミレドド・レレミレド》という音の動きは、私たちの幼い日々に対する、私たちの幼い心に対するはるかともいふべき懐しさの感情を喚起してくれるのである。それはまた明治以来今日にいたるまで、いたるところで愛誦されている、という。それでいて、この歌詞や旋律は一体だれが作ったのか、といった疑問や問いを起させないようなかたちで無記名のまま、ひろく人びとの耳に、そして心に浸透してしまっているのだ。

だからこそ、また、紹介した二冊の書物が、このメロディの、そしてこの童謡の作曲者がほかならぬあのユニークな思想家ジャン・ジャック・ルソーであることが一般にほとんど知られていないという事実を強調して指摘しているのである。ルソーの存在を知らぬ人は少ないが、しかし彼が作曲家であったことを知

むすんで ひらいて

文部省唱歌
ルソー作曲

♩ = 104
mp

First system: Treble clef, 2/4 time, *mp*. Lyrics: むす—んで ひら—いて てを—うって

Second system: Treble clef, 2/4 time, *mf*. Lyrics: む—すん で またひらいて てを うって

Third system: Treble clef, 2/4 time, *mp*. Lyrics: そ の— て を う え に むす—んで

Fourth system: Treble clef, 2/4 time, *mp*. Lyrics: ひら—いて てを—うって む—すん で

The score consists of four systems of music. Each system has a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment (grand staff). The tempo is marked as ♩ = 104. Dynamics include *mp* (mezzo-piano) and *mf* (mezzo-forte). The lyrics are written in hiragana with long dashes under certain syllables to indicate phrasing.

らない人がまことに多いという園部氏の指摘は、たしかに現在でもその妥当性を失なっていない。そしてもうひとつの書物も、このメロディーの作曲者がルソーであることを知らないで、子どもたちが、いな教師たちまでが愛誦しつづけている事実を挙げ、こうした現象とルソーの思想のおよぼしている類似の作曲との共通性を浮き彫りにしているのである。

だが、その後、『むすんでひらいて』がルソーの作曲であるというかたちは一応常識として定着したかに見える。いくつかの実例を挙げてみよう。

中田喜直編『こどものうた』（野ばら社、昭和三十七年「再版二刷・昭和四十八年」）には、この『むすんでひらいて』の楽譜がへ長調、四分の二拍子のかたちで、伴奏つきで収録されているが、『文部省唱歌・ルソー作曲』と謳われている（譜例①）。

レコードでも同様である。たとえば昭和四十七年に発表された『キング童謡デラックス・楽しい童謡名曲全集①かわいさかなやさん』（SKM(B)二一〇一）には、独唱池野八千代でこの歌が収められているが、『作詞・不詳／作曲・ルソー／編曲・小町昭』となっている。

『むすんでひらいて』が『文部省唱歌』となっている点については、のちに詳述することになるが、以上の二つの引用例で見

るかぎり、この歌の作曲者がルソーであるというかたちは、現在ではひろく一般に知られているということになるだろう。

ところで、この『むすんでひらいて』には原曲があるときれている。園部三郎氏の別の著書を引用させていただこう。『幼児と音楽』（中公新書215）中央公論社・昭和四十五年）である。

『音楽取調係』によって一八八一（明治十四）年から八四年にかけて、小学生のための『小学唱歌集』（全三巻）が発表された。その小学生用の教科書の第一巻に、今日では『むすんでひらいて』手をうってむすんで……』という歌詞でうたわれている歌曲が、『見たせば、あおやなぎ、花桜、こきませ、みやこには、みちもせに、春の錦をぞ……』という歌詞で、しかも『むすんでひらいて』と同じ曲でせられていた。（四〇ページ―四一ページ）たしかに、この旋律が一般にひろく日本で紹介されたのはこの『見たせば』のかたちであった。現在流布している唱歌集には岩波文庫版がある。堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』（岩波文庫・緑窓）岩波書店・昭和三十三年）であるが、その最初のページを飾っているのが、ほかならぬこの『見たせば』なのだ。

（譜例②）

柴田清熙（まき）ならびに稲垣千頼（ちか）の作になる二節の歌詞が上段に、そしてへ長調、四分の四拍子のかたちで楽譜が掲載されているが、

ここにも〈柴田清熙・稲垣千頌作詞・ルソー作曲〉と記され、さ
らに「この原曲はルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712—1778)
の作曲。現在でも、『むすんでひらいて』、手を打ってむすんで』の
歌詞によって愛唱されている」と注記されている。

参考までに、この唱歌のかたちのレコードを紹介しておこう。
ビクターレコードの堀内敬三監修・解説《日本の唱歌2》(JV-
二〇七五—六S)には《見渡せば》が《作詩・柴田清熙・稲垣千
頌／作曲・J・J・ルソー／編曲・小沢直与志》で若草児童合唱
団の演奏によって収められている。またこのレコードの解説では
「今でも子どもたちが『結んで開いて手を打ってむすんで……』
という遊戯に合わせた替え唄を用いて歌っている」と説明されて
いる。

ところで、ここ数年来、こうした〈むすんでひらいて〉ルソー
作曲〉について注釈をほどこした唱歌集がふえてきたことが注目
されるのである。最近の唱歌ブームを反映してか、こうした唱歌
集、歌唱集の刊行があいついでいるが、こうした唱歌集のいすれ
もが、ヘルソー作曲説に一応の留保の一句をつけ加えている。

たとえば中公文庫の《日本の詩歌・別巻・日本歌唱集》(中央公
論社・昭和四十九年)では、「この曲は現在『むすんでひらいて』
として広くうたわれている。ルソー作曲説には若干疑問がある。」

とあり、また井上武士編《日本唱歌全集》(音楽之友社・昭和四十
七年)第六刷・昭和五十一年)ならびに三瓶政一郎編《日本童
謡全集》(音楽之友社・昭和四十九年)のいすれもが、〈長調、
四分の二拍子の《むすんでひらいて》の楽譜を掲載し、《作詞者
不詳・ルソー作曲》としながらも、「原曲はフランスのルソー(一
七二一—一七七八)の作曲だといわれているが、最近異説も現わ
れてきた」と注記している。もう一つの実例は金田一春彦・安西
愛子編《日本の唱歌(上)明治篇》(講談社文庫A388)講談社・昭
和五十二年)である。「作詞は、すであつた外国の曲に合せて
作つたもので、この曲は、フランスの思想家かつ教育学者のルソ
ーの作だと伝える。ルソーの喜劇『村の易者』の一節だと言われ
ているが、異説もある」

「ルソー作曲説には若干疑問がある」とした中公文庫版の解説
を執筆されているのは園部三郎氏であるが、〈若干疑問〉がある
とはどういうことであろうか。また《異説》とは一体なんなのだ
ろうか。そして金田一春彦氏の解説にあるように、ルソーのオペ
ラとは、いったいどのような関係を、この〈懐しく甘美な〉、〈楽
しげな〉、そして〈愛らしい〉《むすんでひらいて》の旋律は持つ
ているのだろうか。

こうした問題にアプローチを試みるのが、ただたんにこの旋

見わたせば*

柴田清熙

一

見わたせば、あおやなぎ、
花桜はなざくら、こきませで、

みやこには、みちもせに
春の錦はるのにしきをぞ。

さおひめの、おりなして、
ふるあめに、そめにける。

稲垣千鶴

二

みわたせば、やまべには、
おのえにも、ふもとにも、
うすきこき、もみじ葉もみぢの
あきの錦あきのにしきをぞ。

たつたひめ、おりかけて、
つゆ霜つゆしもに、さらしける。

—「小学唱歌集(初)」冊14・11

見わたせば

柴田清熙 作詞
稲垣千鶴 作曲

み わ た せ ば あ お り や な し ぎ て
 は なる ぎあ く ら に こ そ き ま に ぜ け て る
 み や こ に は み ち も せ に
 は る の に し き を ぞ

*この原曲はルソー(Jean Jacques Rousseau, 1718-1789)の作曲。現在でも「宮中」で聞いて、手を打つてお楽しみなどの歌詞によって愛唱されている。

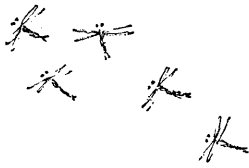
律の起源をさぐる音楽史的研究に没頭するだけではすまない性質のものであるという認識が得られたのは、私にとってもじつはそれほど以前のことではないのである。

この連載で、私はこの《むすんでひらいて》の旋律が提示するゆたかな問題圏に、いくつかの方向からアプローチを試みてみようと考えている。たとえば、それは一方では近代日本が生んだ唱歌や童謡や遊戯歌の問題をひとつの具体的な実例をとおして論じるかたちをとることになるだろうが、それがオリジナルな源泉としての西洋音楽とどのような関係にあるかが次第に明らかとされることだろう。また他方では、音楽家としてのジャン・ジャック・ルソーとその作品を、そしてそのルソーの音楽観や教育観を

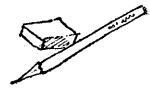
さぐることになるだろうが、それはルソー自身の音楽とのかかわりあいをこえて、ルソーの歿後、彼の音楽実践や音楽思想が、どのように人びとの心の中に根づいていったかといった問題に展開することだろう。そしてまた、この《むすんでひらいて》の旋律を中心に《ルソーと日本》の不思議なかかわりあいもまたあらわとなるにちがいない。

その前に、そうした問題に深く立ち入るために、まず、数年前に新聞や雑誌で展開された《むすんでひらいて》はルソー作曲か？という論議について、そのあらましを紹介することからはじめてみよう。それがまずさしあたって次回の課題である。

(国立音楽大学)



私の幼児教育論



玉井 収 介

幼児教育論といっても幼児だけ特別の「論」があるとは思えない。教育する内容や方法においては違いがあるにしても、土台となる方針は変わらないと思う。

最近登校拒否の子が増えてきた。わたくしは、毎年その親のグループ・カウンセリングを試みている。子どもには接触しない、親とだけ面接する。それは、親が変わらなければ子どもは変わらない、親が変われば子どもは変わる、ということを明確にするためである。

その接触を通じて感ずることの第一は、親達が、子どもを大切に

に育てる、ということを取り違えているということである。

大切に育てるといいことはいいことだ。しかし、それは、子どもが自分で身につけなければならないことを代ってやってやる、ということではないはずである。

それを混同している親が多い。だから子どもは、親がいなければ何もできない子に育っていく。

極端な例になると、小学校の一年生で、毎日親が付添っていき、机の間に座っている。先生が子どもの名前を呼ぶと、子どもは黙って母親の顔をみる。母親が代ってハイイと返事する。

この母親はこの人なりに、そうすればやがて、この子は自分なりの返事をするようになるかと期待しているのかもしれない。

しかし多くの場合、そうはいかない。子どもはますます依存的な子になっていく。

○

登校拒否といわれる子どものことは、昭和三十年代の半ばから報告されるようになった。子ども自身の知能にも身体にも病気も欠陥もなく、親も教育に熱心であり、——つまり、登校できなくなるような理由が外からはないように思われるのに——登校できない子どもである。

しかも、非行がかつた子どものサボリ、怠学というのとも違う。

こういう子どもは昔はいなかったであろう。この親のグループカウンセリングを始めてから五年になる。ある年は二グループであった。もう一〇〇人に近くなるであろう。

前述の例は極端にしても、メカニズムはそれに近いのが多い。たとえば、学校の宿題である。宿題は子どもが自分でやるべきも

のだ。やってなければ先生に叱られるのである。それが必要な経験である。叱られた上で、この次からしっかりやっていこうと考えるか、人のノートを写してしまおうと考えるかは別として、その子なりに次の行動にうつれるであろう。

それを親がやってやる。そして先生の手前をつくらう、といっても親がやってやれる期間はそう長くはない。学校でやることはどんどんむづかしくなるから小学校の高学年になればもうお手上げである。

そこで家庭教師をやとう、その家庭教師が、子どもに自分で考える行き方を教えてくれるならまだいい。こういう親が、家庭教師に求めるのは、そうではない。子どもの宿題を代りにやってくれ、ということなのである。

かくして、子どもは、また、自らは何もすることなく、何も身につけることなく、すんでいく。しかし、学年は進むから、しなければならぬはずのことは増えていく。しかし、自分のものになっていることは少ない。実質的なギャップは拡がっていくわけである。

そして、ある時、ついに全く行けなくなってしまう。

もちろんいろいろなバリエーションがある。ある時期までは優等生であったという例もある。そうであるが故に子どもが自分の

中に、かくあらねばならぬという理想像をつくりあげる。肥大した自我といってもよい。世間しらずの子が描いた自我像だからよく言えば純粹である。わるくいえば現実性がない、だからいつかは、現実にあわなくなる。そして登校できなくなる。

こういう親は極端に子どもに対して弱い、ある親は、子どもがテレビを見る時間が長すぎるので少なくてしようとした。それは結構なことであるがそのことを子どもと話し合うことができない。電気屋を呼んで目立たないようにこわしてくれと頼んだ。電気屋は、「わたしは修理してくれ」といわれたことはじめてだといつて笑ったという。

これではテレビを見ることはできなくなってもそれによって浮いた時間を何に使うかについて子どもは全く責任を負っていないわけである。

○
こういう親たちに接しながら考えることがある。

今、高校、中学の年頃の子どもをもっている世代は、昭和のはじめに少年期を送った人々である。そのころは戦争のつづいた時

代であった。今からいえば軍国主義と批判される時代であったが、社会的な価値観は一定の方向にあった。それが今は非常に多様化している。だから将来どういう子に育てようかということをひとりひとりの親が考えなければならぬ。たまに文部省が「期待される人間像」を出せばよってたかかってたたいてしまう。ところが、このグループに出てくる親たちはそれが考えられない、ひたすら学校にたのみ、家庭教師にたのみ。

そして学校に行ってもらうために子どものご機嫌をとり、物を買い与える。ひどい例になると中学生の子にヨットからゴルフ道具まで買い与える。物を買ってもがまんする力が身につくわけはないから学校へ行けるはずがない。

子どもは登校を拒んでいるから親以外の大人に接することがない。その親が、子どもの顔色をうかがってヘイコラしているのだから自分の将来のモデルにならない。同一視が対象にならない。だからどうしていいかわからなくなる。

○
さて本論に入って、幼児教育の一ばん大切なことは、子どもを

大切に育てるということは、子どもが自分で身につけなければならないことを親がかわってやっていると混同しないことだと思ふ。自分で覚えるべきことは覚えさせなければならないのである。

では幼児期の終りまでに子どもが自分でできるようになるべきことは何であろうか。

順調な発達をしている子なら次の三つのことではないだろうか。

一つは、話し言葉のひとつとりの完成である。もっと具体的にいえば、日本語なら日本語の中で使われる音が、ひとつとりの発音できるようになること、超特急を、トーチョコキューというように発音の倒置がなくなること、犬のことをワンワン、自動車のことをブーブーというようにない方がなくなること等を意味している。もちろん、人のいうことも理解できることもふくまれていてる。

文字の方は通常ならそのあとである。ただし、テレビの普及などで読める時期が昔より早くなっていることは事実である。

とくに日本語では、カナという大変便利な文字があるから特に文字を教えこむことを急ぐ傾向がある。本来学校に入ってから覚えることをそれ以前にやろうとする。

だがこれは注意を要する。平がな、カタカナとABCを比べてみればわかる。どちらも表音文字である。だが、違った点がある。かなは、話したとおりに書けば文章になるが、ABCはそうはいかない。文字のスペルを覚えなければ文章は書けない。

ところで、会話というものは、文章としてみた場合、非常に不完全なものである。半ばは相手の言葉に依存しているし、身振りや表情で補っている。だから、AB二人の会話を記録して、Aの方だけ消してしまったら、Bの話していることはまことに不完全な文章になる。まして、日本語は主語を略してしまうからなおさらである。

だから、本来ならいきなり書く作文ではなく、口頭の作文とでもいべき、つまり、文章体として完全なものを言わせてみる、という段階があつてよいはずである。ところがそれをやらないでいきなり書かせる傾向があつてい。

話し言葉の中では、「ほくは、けき七時におきて、顔を洗つて、ごはんを食べてから、学校に出かけました」などとは決していわないのに書かせようとするのである。

二つ目は、身近の生活習慣の自立ということである。食べる、眠る、衣服の着脱、排便、保健衛生などの日常生活に必要な習慣

がひとりであるように、ということである。

こういうことは、大人が、ケガでもして食事もトイレに行くことも人手を借りなければならなくなったときを思い浮かべればよくわかる。その期間中、入院するかして、社会生活からリタイアしなければならぬであろう。

もちろんひとつひとつの習慣によって自立する時期に違いがある。昭和十年代に山下俊郎氏が、生活習慣自立の水準というものをつくった。数年前にある人が、現代の子どもにやってみたところ、あまり変らなかつたという。ただ、着物を着るのが早くなつて来た。これは、楽に着られる着物が多くなつたからということが理由らしい。たしかに、昔は、ひっぱりあげて放せばそれだけで、などというズボンはなかつた。

もっとも、あまり便利になりすぎて、かえつてできなくなつたことも最近では増えてきている。小刀で鉛筆をけずれる子は最近では少ないのではないだろうか。ぞうきんのしぼり方のわからない子も実際にいたということである。今に、ひもの結べない子、自動でないドアの前では黙つて立っている子などが出てくるかもしれない。

あるところでは、一回だけ接した子であるが、母親が、面倒だというので、天気の良い日にもゴム長をはかせている子がいた。こ

の子は脱ぎとばすことはできたが、脱いだくつを揃えることはできなかつた。

三つ目に大切なことは、課題意識の成立ということである。こういう言い方をするとむづかしいが、要するに、嫌なことでもしなければいけないことはする、好きなことでもしていけない時間にはしない、といった心構えが成立することである。仕事とあそびの分化といつてもよいかもしれない。

はじめに述べた登行拒否児などはこの意識の非常に弱い子である。トランスの低い子といつてもよい。

四月のはじめの幼稚園では、どこでも大てい、嫌がつて泣く子がひとりやふたりはいるものである。

そのとき、どうしても行かせるといふ姿勢を親がもつていと、しばらくすると大ていの子どもは、子ども同士のあそびの中に入れるようになり、やがてその方が面白くなっていく。

それを、かわいそうだ、かわいそうだ、親がいつまでもつきそつていたり、極端な場合は止めてしまつたりする。義務教育ではないから、止めてしまうのは自由だけれども、それは問題を表面化させないだけの話である。元気に通園している子はどんどん社会性を身につけていくからその差は、ひろがるばかりである。

「論」というに値するかどうかわからないが、最近の傾向でわたくしが気になっていることを最後に述べておこう。

それは母と子の結びつきが弱くなり、人間の声が生の人間からでなく、機械から聞えてくるが多くなったことである。

母親が母乳を飲ませることが少なくなったから昔のような、いわゆる乳臭い赤ちゃんが減ったような気がする。おむつの洗たくもする人が少なくなった。子どもの便をみるというのは健康状態を知る大切な手がかりなのだが貸しおむつの人たちは不安はないのだろうか。

子守り歌もテープから聞えてくる。おとぎ話のテープもある。

こういう傾向がつけば、母と子の結びつきは弱くなるのではないだろうか。子守り歌は何も名曲である必要はない。母親のひざで、あるいは背で、本物の母親の声を聞いてこそいいみがあるのである。

最近はまだ、背中にオンブするのに、うしろ向きに腰かけさせる道具ができた。背中にひもでくくりつけるのは足の発達にわる

い、とでもいう発想から出たものであるが、わたくしはあのころから親子が背を向けあって暮すことにはないと思う。

もうひとつは、核家族が進んで、母親がアドバイザーをもたなくなることである。だから育児書にたよるほかない。それも大部のものをていねいに読んでくれればよい。発達には個人差があり、あることができるようになる時期にも早いおそいがあることが書いてあるからである。

それを、婦人雑誌の付録のようなものを読んだり、テレビのコマギレの五分の番組をみたりする。そうすると平均の平均のことしか書いてない。だから、何か月の赤ちゃんは何CCのミルクを飲ませなければいけない、といった焦りになってくる。

ホンのちよっとしたこと、児童相談所に電話をかけてくる例が最近が多いということである。

生れて二か月の子に、テレビで見た赤ちゃん体操をやって骨を折ったという記事をみたことがある。年齢をまちがえて、この赤ちゃんには到底無理な運動をさせた結果であるという。

コマギレのテレビ番組をみるからおこなうことである。育児書しか頼るものがないにしても、せめて、ていねいに順序を追ってよんであればこういうことは起らないであろう。

(国立特殊教育総合研究所)



クリちゃんの動物園散歩（一）

根本進

私が「クリちゃん」を朝日新聞の夕刊に画きはじめたのは昭和二十六年でした。

当時の私はその四コマの漫画を一日に一枚画くだけ——と言えば、ずいぶんの大きな生活の様で、実はとても苦しい毎日でした。連載に字を使わない漫画（パントマイム、またはサイレント漫画とも言います）を画くなんて、とんでもない事をはじめてしまったと後悔したこともあります。

出来なくて、行きづまると仕事忘れにデパートを歩いたり、野球、映画などをみたり、日中から酒を飲んでみたり……いろいろな気分転換を試みました。動物園の散歩もその一つで、これはかなりの効果がありました。

疲れた頭を休めるには、サル山の前に行って十五分も見ていると、行きづまった考えや、嫌な気分はケロッと忘れます。

よく見ていると、どんな動物でも面白いもので、象が藁を食べる時は、あんな大きな図体でも、しぐさのキメは意外に細かいのに驚きます。たとえば上野のインディアは一束の藁を鼻で持ち上げると、まず前肢の足首にぶつけて塵を払い、穂先の方をちょっと口にくわえて、鼻先で茎の部分を手寧にしながら摘めます。改めて鼻で藁束の中ごろを持ちなおしてから、茎の美味しい所だけを一口にくわえて、あとはバリッと噛み切って捨てます。それからゆっくりと口中の藁をモリ、モリと味わう様にすりつぶして食べます。

同じ事をするにも一緒にいるジャンボと、メナムは少しずつ違って、つまり十頭十色の個性差があるのは興味深いことです。そんな光景にみとれていると、私の頭の中が不思議にさっぱりしてきます。

私だけでなく、他のお客を見ても相手が動物ゆえに、



S
U
S

すぐ心がなごむ例は沢山見ました。「ほらほら、孔雀くわんせうさんが大きな羽をひろげてるでしょ……」なんていうと、それまで大声で泣いていた子も泣き止んでしまう様に。

スイスのチューリヒの動物園でした。寒い曇り目で、お客はまばら。四人の親子が私の前後に離ればなれに歩いていました。この一家は、ここへ来る電車の中で、兄弟喧嘩がはじまり、それをきびしく叱ったり、かばったりするうちに夫婦の間ももめてきて、お互いに冷たい顔付きになっていました。

ところが動物園の中ごろでヒグマの赤ん坊が三匹で母親のオッバイの取りっこをしていました。ヒグマの乳房は胸に二つ、腹に二つあって、それぞれが乳房にかぶりついてチューチュー音をたてて吸うのですが、出が悪くなると、急いで他の乳房にとりつきます。三匹が母親の体で右胸から左の腹へ、かと思うと右腹から左胸へ、大あわてに相手かまわず乗り越えて先を争う様は、全く可愛らしくて、滑稽です。そこだけに大勢のお客が溜って笑声が止みません。そして気がつくと、さっきの一家はその後は手をつなぎ合って歩いていました。

南米はチリの首都サンチャゴの動物園では、愉快的な経

驗があります。丘を登って行くと動物園の入口でした。

初符を買う時に「案内図は？……」と英語できいてみると、切符売りのおばさんの答えはスペイン語で、私にはわかりません。あきらめて歩き出すと、「ちょっと待って」と合図して大急ぎで部屋を出て行きました。向うの木蔭の長椅子で、十二、三歳の少年が本を読んでいます。おばさんは大声で何度も呼び、「英語で案内して上げなさい」と言っている様子です。しまいに本をもぎとり、手をひいて来ました。「イヤだよ、僕だってそんなの……」と言わんばかりの少年のふくれっ面をみて、こっちも嫌になりました。私は独りで気がねなしに見物したかったです。プリプリとイヤイヤの二人は仕方なしに黙って歩きました。

遠くを眺めると、ここもスイスに似てアンデスの山々が屏風の様です。見晴しのよい所に、チリーの狐、ハナグマ、アルパカ、それからいくつか南米の小動物の展示が続き、その先にウーリーモンキーがいました。南米産のサルたちは尾を上手に使って、まるで手が一本多いみたいに便利そうです。

ところが、その中の一匹が木から落ちたのにはびっく

り！思わず大笑いです。こんな光景を見るのは少年もはじめてらしくアハハハと腹をかかえて笑っています。それがきっかけで二人は仲よくなりました。それから彼の熱心な案内がはじまりました。

ちょっとした説明でも、その動物の習性をよく知っている様子でした。アフリカ水牛と言えは暴れん坊の印象ですが、柵を越えてその檻に入って行って、大きな背中に跳び乗ったのには驚きました。少年の名はホルヘ君といい、前園長のこともでした。だから幼年時代からここは自分の家の庭なのです。

嬉しかったのは、南米の小鳥の美しい羽毛を沢山スーベニアに呉れたことですが、その集め方が変わっていました。どこからか長い木の枝を見つけてきて、その先につばをつけ、ケージの網目の間からそーっと突っ込みます。地面に落ちている羽毛が、その枝先にくっつくことまたそーっと取り出します。ホルヘ君は一枚一枚時間をかけてとるのをちっとも面倒がらず、落付いて、やっています。実はこれは小鳥を驚かささない心くばりだったのです。大人にはとても思いつかぬステキな思いつきだと感心しました。

(漫画家)

幼児たちから学ぶ

かずかずのこと ⑤

——水色のノートから——

丸山ふみ

運動会の前日

夕方まで降っていた雨も幼児たちがテラスや靴箱の横に下げた大小さまざまな「てるてる坊主」の願いを聞きとどけてくれたのか風にかわり、短時間に準備を終了し〇先生と園舎の戸締りをすませて見上げた空には星が光っておりました。

暗闇の中で白くテントが浮き上がっているまわりに人影が動いているのは、明日のために観覧席の確保にやってきた父母たちです。

このように、家族総出で、いや地域の多くの人達さえ楽しんで待っていただけの運動会ですのに障害をもつ幼児が在籍している年をはじめて運動会を迎えるように不安になる自分

が情なくなるのです。

それは、幾年も前のことですが級を担任していた頃運動会の前夜、「明日の運動会やっぱり休ませます。お祖母ちゃんがどういっても承知しないのです」と電話をかけてきた母親の泣声がいままで心から去らないのです。

障害児に対して一般に理解が深まり幼児の集団の中で障害があっても、我が子が成長していく姿に自信がもてるようになって、運動会という行事のなかですごく一日が決して楽しいものでない家族もあるのです。

昨年は、一四九名の四歳児のなかに、小児てんかん症、自閉症、難聴などの障害をもつ幼児が五名いて、その幼児たちに対してそれぞれの担任の示す愛情や苦心はどんなに文字を並べても空虚になってしまうような日々がつづいていました。

種目の選定・演技中の進行などを協議する時、五名の幼児の側に立っての立案はなかなかうまくいかないのですが、「先生、そんなに心配しなくても大丈夫よ」と担任を励ましながらも、ひとりひとりの幼児を大切にすることが運動会という園全体の行事を成功させることになると自分自身がいい

きかせているのです。

動物の行進

次の日は快晴に恵まれ、プログラムは順調に進み、「次は四歳児の表現遊び・動物の行進です」と進行係の晴れやかな声が園庭一杯に流れます。

入場門の前には五色のクラスの旗を先頭に整列している幼児の姿をテントの中から目で追っていきますと多くの幼児たちの嬉しそうな顔の中に、M、H、T、K君もまじっており緊張している担任とは対照的な幼児たちの動きです。

スピーカーから流れる音楽にのって馬になったり象になったり蝶のように跳ぶ幼児の動きに観客席から拍子が贈られています。小児てんかん症のM君はスキップができませんが彼自身は、嬉しそうに担任に手をつないでもらい、リズムにあわせて動いています。

でも、自閉症のH君は両手で耳をふたして立っています。そのまわりで目立たぬように担任はさりげなく彼の身体を動かして他の幼児の動きに支障のないように配慮しています。障害をもつ幼児の集団はギクシヤクする。しかしそれが人間

の社会というもので障害をもつ幼児のいる級こそ人間関係に幅のある級づくりができると文章では読んでも、みた眼にはさりげなく動いているが担任の汗に光った顔や、緊張した表情をみているこの数分間は園長として長くつらい時間です。

運動会が終って担任に深々と頭を下げて帰られるH君の母親が、五月下旬連絡ノートに「初めての保育参観に出席させていただき、お友達とはずれた行動をとるのがやはり少々気になりましたが、いつかきつとみんなについていける日がくると信じ自分を勇気づけました。(以下略)」と記されていたが、私共もまた、障害のもつ特殊性に目をうばわれて幼児のもっている発達課題を見失ってしまわないように努力したいものです。

数百名の観客のみる真中で両手を耳にして立っているM君が担任がすこし身体にふれるだけでその場所を移動することができるということは、会話の成立しないM君に担任こそ自分を守ってくれる味方なのだという信頼感が四月以来の毎日毎日の中で培われ、そのことが保育の基本なのだと改めて学んだ一日でした。

(松阪市立松江幼稚園)

私の保育



水野 恭子

はじめに

上越市には、「たんぼほ園」という保育の場がある。ここには、重度心身障害児小規模母子通園事業という長い名前が行政からつけられている。「たんぼほ」は、今、四歳になる。その間、ここにかかわる全ての人の願いと理想が、不遇だった就学前のハンディキャップを持つ子らの光明となってきた。

昨年九月、前主任保育者から保育を引き継いだ。私の保育の良心に従い、子どもの幸せとなる保育をやりたいと思った。子どもからの要求に即した保育に重点をおいた。上越では、この自由保育と呼ばれる形態を集団保育への口火である「オアソビ」と

しかとらえていない園が多い。しかし、私は、自由保育こそが真に子どもの発達を促すものと信じ、大切にその時間を使うことにした。描画コーナーを作り、クレヨンの使用を自由にし、楽器を開放した。マットや平均台、ボール、クッションなどを勧め、そして、何よりも園外保育を多くした。体全体で創造的に動いてほしいと思ったのだ。日本海の潮の香りのする松林の公園を、今日も子どもらは走りまわっている。

たんぼほ園には自閉的傾向を持つ子が五人いる。ここでその中の三人との出会いを語ろうと思う、つたない一文の中から何かを感じていただけたら幸いである。

A との 出 会 い

一九七六、九、二四

始めて大きなボール（直径一メートル位のゴムボール）にかかわってきた！

いつも行く隅のすべり台の階段に彼がいる。

私、大きなボールで一人遊びをしていた。

彼が私とボールを見ている。

私、ボールをそろそろ押していく。彼を見ないふり。ボールをすべり台にくつつける。後向きになって、背中でボールに反動をつけながら、小さく歌った。「ドは、ドーナツのド……」（この歌は子どもが大好き）

彼、足をそっとボールにつける。

私、知らないふり、はずみをつけながら歌い続ける。

彼、両足をつける。向きを変えてよじ登ってくる。

私、ワクワク。こらえきれず、手を出す。

彼、逃げ出す。

この日はここまでだった。しかし、どうやら彼との出会いが臍気に見えてきた。このボールを使っていこう。そして歌と。

一九七六、一〇、五

ボールの上でひとり立ち上がる！

今日は窓際にボールを押して行き、そこではずませる。

彼、先回のようにボールによじ登り、ついに立ち上がる。私の方へ？（そう思いたい）ほほえみかけてきた。

私、そっと手を出す。

彼、その手を握り返してくれる。

私、バンザイ。ついにつながった。

しかし、その後、彼との交わりは決して順調とはいえないまま一年。

一九七七、一一、一八

にしき学園にて児童相談所主催の療育教室、午後、私はAと二人になれる機会を持った。それまでの観察から、彼が音楽を好きなのは充分承知していた。歌いながら手をつないで歩く。

彼、初めはしぶしぶ。時々ストライキ。そのうち、何となく楽しくなってきたみたい。笑顔が見えてくる。公園でブランコやすべり台をして遊ぶ。九月以来の園外保育のせいか、彼の姿が実に伸び伸びして見える。帰り、私と再び手をつなぐ。時に私をからかいながら。

私、アー、つながったと思った。

こちらが「つながった」と感じられた時、それは何かを共感した

時だと思ふ。そして、その時から関係は伸び始めていく。「つな
がった」という時は、こちらの心を開いた時、こちらの構えをは
らった時、すなおに彼らと共感できる時なのではないだろうか。
こちらが彼らの心を開かせよう、開かせようとしても、決して彼
らの心は開かない。反対に、彼らから見たらこちらの心が閉じて
いる時なのかもしれない。何かふっと肩の力を抜いた時、リラッ
クスした時、彼らと心がつながっていく。彼らから見たら、自閉
的なのはこちらなのかもしれない。私は時々こんな風に思う。

B との 出 会 い

彼は非常に弟思いであり、弟が泣くといっしょになって泣いて
いる。弟はBにとって大切な存在なのである。私はそんな意味か
らもよく弟と遊ぶ。その事がBとの関係を深める一つの要因とな
っていると思う。たんぼぼ園が要助児のみの園にならないで、で
きれば健常といわれる子と共にある園であることが望ましいと思
うのだが……。

Bはすばらしい切り紙をする芸術家でもある。彼に会ったのは
昨年九月、首をすくめて、肩を少し丸めるようにしてヒョイヒ
ョイと歩いてきた。私は一目見て、彼を好きになってしまった。
彼には独特のことばがある。「ファッフファッフ」嬉しい時の

ことばである。「オニョオニョオニョ」怒った時のことばである。
もっとも後者のことばは一歳五か月になるある女兒も口をとがら
して連発することばであり、とすると、言語発達のある段階なの
かもしれない。

一九七七、九、二二

部屋の中をグルグルと落ち着きなさそうな彼がいた。遠くから
彼の視線の先を捜す。どうやら、その先はおもちゃの車（船の形
をしている）らしい。その車を持って行ってやる。

彼、即座にそれに乗る、一日中走りまわっていた。私、アッ。
彼の好きなもの、安定するものがわかったと思った。

自閉的といわれる子らは、何か安定できるものができる、そ
こから世界を開いていくことが多い。ものを通して徐々に人間に
も接して安心でき、やがて共に歩んでいけるように保育者はかか
わっていかなくてはならない。急いではならないのだ。

一九七七、九、二六

昼食頃、Bのようすがいつもと少し違う。お弁当に入っていた
笹の葉を持ってニコニコ。こちらに見えるように手でいじってい
た。それを持って私の席近くまでやってきた。今朝彼がやってき
たので大好きな車を渡してやったのだが、そのことが嬉しかった
のであろうか。段々と彼を身近に感じてきた。

食後、散歩に出かける。彼のとなりを歩く。そつと手をさしよる。

彼、その手をそつと握ってくれる。

二人で歩く。すごく感激。私の手、柔かだったかな？

一九七七、一一、一八

Bとの関係をもつと深めたいと思っていた。けれどあせつていは、かえつていけない。ふつと息を抜いてみなくては。

にしき学園での療育教室、まもなく終了という三十分前。ボールを体育館の隅の彼に向かつてころがす。

彼、受けて投げ返す。とんでもない方向へころがっていく。

私、走つていつてボールをつかみ、またころがす。

彼、返す。

この繰り返しをするうちに、やがてボールが確実に私に返つてきた。彼と私がボールでいっしょに遊べているのである。

私、少しずつ、少しずつ彼との間合いを狭める。ついに彼の横に坐る。ボールを彼はもてあそんでいる。

私、彼の柔かそうな髪をなでる。

彼、気持よさそうになすがままにされている。

本誌第七十六卷第七号の中で、津守先生が、「幼稚園では先生が、家ではお母さんが、子どものよりどころになつてゐる」とい

うようなことを文の中で書いておられた。先生がごく当たり前と書かれていることが、たんぼ園ではできてゐるだらうか。たんぼ園は週二回しかない。しかも母子が共に活動するため、彼らの安全基地となる中心の保育者が、お母さんなのか、私なのか、彼らにはわからなくなつてしまふことが多いのではないか。二つの違つたよりどころを作つてはいけない。私は日がたつにつれて、母子を分離する機会を持つにつれて、痛切にそう思うようになった。できる限り、母子分離を行なうことにした。

一九七七、一二、九

四十分の母子分離。子ども十一人に保育者五人、絶好の日だった。子どもには黙つて母親を隣りの和室に去らせる。大きなボール、クッション、おもちゃの車、ブロック、楽器など、どの子もよく遊べてゐる。Bはいつもの車にのつてゐる。

三十分位後、車から降りて窓辺へいく。外は雨。

私、そつとBに近づく。彼といっしょに通りの車を目で追う。窓から手を出して雨を受ける。その時、彼がその手をひっぱる。ぬれているのが気になるらしい。

私、もう一度出す。

彼、再びひっぱる。そして私の手をギュッと握つて笑つてゐる。嬉しい。

突如として、ピカノゴロゴロ。彼、窓から離れて、一目散に大好きな車へ。母子分離が終わっても、まだピカノゴロゴロ。彼はお母さんの所へもいかず、車にしがみついている。徐々に彼は私との関係を深めてはきている。が、まだまだ、ものを通しての触れ合いが大切な段階なのだと思われる。

Cとの出会い

彼とのつきあいは長いが、心がつながったと実感できたのは、つい最近である。

一九七七、九、二六

午前中、Cが窓辺の整理箱にのぼって手をたたいていた。今日はその彼の状態を受け入れてみたいと思った。私も窓にのぼる。ふと心をかすめる。外から見たら、変な二人に見えるだろうな。かまうもんか。ああ、いい気持ち。気持ちが高まっていくみたい

に思う。彼がニコッと私を見た。私も嬉しくなった。

彼、私のみぞおちのあたりをボンボン叩く。

私、しゃがんで、彼のおなかをボンボン。

彼、手をパチパチ。「ウオウオウオ」

私、手をパチパチ。「ウオウオウオ」

彼、すっかりごきげん。私が腰をおろすと、ひざの間にすっぽ

りと体をうずめてだっこしてきた。私が「木の葉」を歌うと、静かに聞いて安定している。つながったと思った。

彼にとって、私は違う人間であるのに、私が彼の補助自我的役割を演じたために、まるで自分を鏡で見ているように思えたのではないだろうか。そのことが私との関係を密にして、やがて、一對一の関係で共に歩んでいく接在の状態になったのではないかと考えられる。

思うこと

子どもとかかわる時、こちらがあまりに明確な目的を持っていては、子どもが見えなくなってしまう。白紙の状態で、まずなすがままの子どもを肯定し、あきらめず、疲れることなく、その子に学んでいけば、そこにおのずと道は開けるものと信ずる。

そのために私がかけている事をあげると、

一、視線に注意すること……私の近眼を長所として生かそうと思う。強い視線に、子どもが逃げ出すことがよくある。時に後から、横から子どもに近づいていく。

二、ことばかけに注意……ことばが遊びを規定し、又崩壊させることがよくある。体全体で子どもを受けとりたい。そして、ことばにあらわせないでもやもやしている子どもの心をかかわること

ばにして出してやれたらと思う。

三、園外保育の充実……子どもは大地に接し、自然の中でこそ育つていく。

四、ものを上手に介在させていく。保育者自身をおしつけていくのはならない。

五、音楽のつかい方……二度か三度の八小節の歌を作って、それに簡単な動きをつけてみたが、効果的だった。リズムを生かすことを考えながら、もう少し、コダーイを学びたいと思っている。

保育者は、子どもたちの心のよりどころとなる存在である。これが往々にして、子どもに対して「教える」「統率する」という姿勢を生みやすい。しかし、保育者こそが、子どもと接していく中で、自身がどう伸びるかを考えて行動すべきであると思う。伸びようとすると姿勢がなくなった保育者は、保育者ではない。

たんぼぼ園は、本年十月、市立になろうとしている。そうなれば、今かかえている多くの問題も徐々に解決されていくことと思う。しかし、子どもらは「今、ここで」伸びている。今ここで充実することが次への発展につながると信じ、いつもベストの保育をと心がけている。

最後に、大好きな良寛さまの歌を一首。

「つぎてみよ ひふみよいむなや ここのとを 十とをさめて

また始まるを」

良寛さまは最高の保育者であると思う。子どもは良寛さまといるだけで幸せになった。又、良寛さまも子どもといることが嬉しくてしかたなかった。大切な鉢を忘れて、スミレをつみ、手まりをつき、自然の中で子どもと共に生き、遊ぶ姿を思う時、私も又、幸せな気持ちになる。この歌は、保育の世界そのままであるとも思う。リズムを調べ、繰り返していく中で保育は高まっていく。

更に、輪が広がっていく気がする。何かにゆきつまった時、私は良寛さまを思い出す。一人で目を閉じ、ポンポン、ポンポンと呼吸を調べていく。私自身も自然の中へかけ出していく。するとそこから、また世界が生き生きと動いていくのではないか。

保育の現場にいる者が保育を学んでいこうとする時、同職者の体験談や意見、技術等を学ぶと共に、他領域にも目をむけることが大切ではないだろうか、私はそんな意味からも好んで古典にふれる。すると、自分の中で大切だと思いつつもどうしてもことばにならなかつたイメージがことばになって生きてくるのがままある。つまり、私にとって古典にいそむことが、理論化、言語化していく情緒の世界である保育をことばであらわす手がかりとなっているのである。そして、そこから又、新しい保育が始まっていくような気がしている。

乳幼児集団保育の問題点

— To work or not to work —

黒田実郎

フロイトの仮説の検討

成人の精神障害の治療をライフ・ワークとした精神分析学の創始者ジグムント・フロイトは、患者の生活歴を追想法によってさかのぼり、乳幼児期に経験する精神的外傷 (psychic trauma) が、神経症の原因になる、という仮説をたてた。

乳幼児が経験するもつとも強烈な精神的外傷とは一体どのようなものであろう……それはおそらく彼らにとつて

最愛の人である母親との突然の離別の経験であるにちがいない。

母親との間に愛着性 (attachment) が形成され、そして人見知りがすでに始まっている生後六か月以降の子どもが、母親から突然離されて、乳児院などの施設や、完全看護の病院に入れられると、いろいろな心身障害を示すが、このような症状は精神分析学者 R・スピッツによってアナクリティックうつ病 (anaclitic depression) と名づけられている。

その後、英国の児童精神医学者 J・ボウルビィは、突

然の離別経験の直後に起こる子どもの反応過程を、反抗 (protest)、絶望 (despair)、離脱 (detachment) という術語を用いて、母親との離別が子どもに与える重大な影響を次のように説明している。

最初のうち子どもは激しく抵抗し、必死になって母親を取り戻そうと努力する。その後、母親を取り戻すことに対して絶望したかのように振舞うが、しかしまだ母親に心を奪われており、その復帰を期待している。さらに後になると、母親に興味を失ったかのような反応が現われ、母親から情緒的に離脱するように見える。しかしながら、もしも分離期間がそれほど長くない場合には、子どもは決定的に離脱したようには思われない。母親と再会してしばらくたつと、母親に対する愛着が再びよみがえる。そして、その後しばらくの期間にわたって子どもは母親のそばから離れようとせず、もしも再び母親を喪失する危険性を感じると激しい不安症状を示す。

分離期間が長ければ長いほど子どもの情緒的離脱はよりいっそう深刻になり、母親と再会しても、深い愛着関係を取り戻すことが困難になる。そして子どもと他の人物との人間関係も浅薄になり、生涯、他者との間に深い信頼関係

を持続することができなくなる。このようなパーソナリティの持ち主でも、一応外見上は適応的行動を示すこともあがるが、いったん衝撃的な出来事に遭遇したり、ストレスが続いたりすると、情緒的動揺が激しく、回復が困難な神経症的症状や反社会的行動が現われる。

このように、幼い子どもが突然母親から分離され、未知の環境で、長期間にわたって愛着対象を喪失すると、パーソナリティにいちじるしい損傷を受けることはこれまでの研究で、ある程度確かめられている。したがって、乳幼児期における母子分離の経験は、まさにフロイトのいう外傷的出来事にほかならない。

保育所のメリットとデメリット

ところで、長期間にわたって愛着対象人物を喪失する乳児院などの子どもたちと比較した場合、毎日、長時時にわたって母親から分離される保育所児もパーソナリティの形成においてなんらかの悪影響を受けるのであろうか。

三歳以上の子どもに比べると、三歳以下の子どもが初めて保育所に連れてこられた場合に示す分離不安は、乳児院

の子どもに匹敵するほど激しいことが多い。特に、母親による言語的説明を理解し得ない一歳台の子どもにとつて、登園初日に経験する母親との離別は、おそらく永遠の別れと感ぜられることであろう。

従来、乳児院や子ども病院などで観察された子どもたちの反応と同様に、保育所に入所した子どもも多くも、当初、激しく泣き叫んで抵抗し、やがて絶望して沈黙する。

そして数時間後に迎えにくる母親を見ると、しっかりとしがみついたり、泣き叫んだり、安堵の情を浮かべたり、また時には無表情のままであつたりする。このように反応はさまざまであるが、これらの個人差は、子どもの気質、年齢、性などのほかに、おそらくそれまでの母子関係が決定的要因として働いているようである。

入所当初に示す子どもとの分離不安反応はやがて消失し、それにかわつて徐々に集団生活への適応的行動が現われる。したがつて、当初にみられる保育所児の激しい情緒的ショックを、フロイトのいう外傷的出来事に相当する経験とみなすのは行き過ぎであろう。しかし、もしも保育所において暖かい保護が与えられなければ、低年齢児の入所経験はやはり一種の外傷的出来事になるかもしれない。事

実、母性的な暖かい養育がほどこされていない乳児保育所の子どもの中には、ロッキングなどの常同行動や、その他の不適応行動を示す者が多い。

ところが三歳以下の乳幼児の集団保育に対するこのような危惧とは対象的に、他方において、零歳からの集団生活は子どもの社会性や自立性を伸ばすだけでなく、DQなどの能力も向上させるので、むしろ望ましいことだと強調する見解もある。

従来 of 心理学的研究では、一歳未満の子ども同志の人間関係は必ずしも社会性を伸ばすのに役立たないという説が支配的であつた。たとえば、米国の心理学者シャローツ・ビュラーは、子ども同志の横の人間関係がいつ頃から社会的な意味をもつようになるかを調べるために、二人の子どもを対面してすわらせ、その中央に空箱、棒、たいこ、ボールを置いて遊ばせる実験を行なつた。

満六か月から八か月頃の子どもは、遊具を取りあうことはあつても、パートナーとしての人間関係はまだ困難で、たとえ一方の子どもが働きかけても他方の子どもはそれを無視することが多かつた。満九か月から十三か月の子どもは、相手の存在をある程度意識するが、それでもこの年齢

では子どもの関心は先ず最初に遊具に向けられ、それから物の奪いあいが起こり、その結果として相手を意識するというのが普通であった。

満十四か月から十八か月頃になると、子どもの関心は次第に遊具から相手の子どもに向けられるようになり、そして満十九か月から二十五か月頃になると、遊具を用いて一緒に遊ぶという傾向が次第に顕著になる。つまりこの段階になって、初めて他の子どもが遊び仲間としての役割をある程度果たす、というのがビューラーの実験結果の概要である。

筆者はまだこの実験を追試していないが、このような観点から保育所児を観察すると、やはり一歳未満の子ども同志の関係は、必ずしも社会性を伸ばすとはいえないようである。これについては目下一つの実験を計画中であるが、この種の実験以外に、零歳から集団生活を体験している保育所の三歳児と、三歳以降において初めて集団生活を体験する保育所の三歳児について、社会性や自立性を比較するような研究も現在行なっている。これらの研究結果についてはいずれ機会を見て報告したいと考えている。

ところで、零歳からの集団生活が子どもの自立性や社会

性を伸ばすのに本当に役立つのであれば、乳児院で育てられた子どもの発達が最も順調であってもよいはずである。ところが実際にはそれと逆の結果がしばしば報告されているので、零歳から保育所で集団生活を始める子どもの場合も、メリットよりはむしろデイメリットの方が多いのではないかと懸念されるのである。

働く母親と子どもの問題

近年、乳幼児をもつ母親の就労の増加により、保育所（特に乳児保育所）増設の要望が年ごとに増大している。このような社会的ニーズに答えることも必要ではあるが、三歳未満の子どもの集団的保護が子どもの精神発達にとつてどのような影響があるかという点について、心理学の立場から研究することも必要である。

十年ほど前に英国で、乳児をもつ母親は“*To work or not to work*”（働くべきか働かなくていいか）ということが社会的に注目され、数名の心理学者がそれについて研究したことがあった。その研究結果は“*Working Mothers and Their Children*”という題名で単行本として出版されてい

る。筆者のこの論文の "To work or not to work" という副題から、多くの読者はおそらくシェイクスピアの "to be or not to be" というあの有名な句を連想するであろうが、筆者は実はそれを前掲書の最後の章の見出しから引用したのである。

この本の結論の一部を要約すると次の通りである。

(1) 三歳以下の子どもをもつ母親が専任職 (full-time work) につくことは望ましくない。なぜなら、子どもの精神の健康にとって必要な母子の深いきずなを形成することができなくなるうえに、母親にかわるよき養育者を得ることが困難であるから。

(2) 三歳以下の子どもをもつ家庭に経済的援助を与えて、なるべく母親が家庭にとどまり、自分で自分の子どもを育てることが望ましい。

(3) しかし、乳児保育所などの保育施設を閉鎖したり、縮小したりすると、より劣悪な条件の未公認保育所などが増加するので、そのようなことは避けねばならない。

(4) 母親が安心して短時間子どもを預けることができる託児所 (nursery) や保育所 (day care) を増設すべきで

ある。

(5) 三歳から五歳頃の子どもは毎日長時間母親から分離されても特に悪い影響を受けるとは思われない。

(以下省略)

このように英国における研究では、三歳という年齢を境にして、集団保育の適否が論じられている。わが国ではこの種類の研究が非常に少ないので、乳幼児保育の問題が、福祉行政面や、社会的ニードや、あるいは感情論によって左右されやすい傾向がある。

子どもの精神発達という観点から考える場合、果たして乳幼児の集団保育にはどのようなメリットとディメリットがあるのだろうか。また三歳という年齢を、日本の場合にも一つの基準とみなしてよいのであろうか。これらのことを判断する一助として、聖和女子大学乳幼児保育センターの子どもと母親を対象にして、筆者とその共同研究者は数年来、一連の心理学的研究を行なっている。次に紹介する横浜恵三子の研究は、それらの一環として行なわれたものである。

(聖和女子大学)

集団保育の適齢期に関する研究

横浜恵三子

乳児は最初、母親と対人関係を結ぶが、身心の発育と共に、母親との一対一の関係の輪を広げて、同年齢の仲間や、他の成人との人間関係を成立させていくことにより、しだいに豊かな社会性を身につけていく。健全なパーソナリティを形成するには、乳幼児は何歳頃から集団保育を受けるのが望ましいのであろうか。

実際、保育所においては、産休あけの四三日目から、あるいは三ヵ月や六ヵ月から乳児保育を開始しているし、幼稚園においては、三歳、四歳、五歳からそれぞれ就園させているが、集団保育を受ける年齢は、個々の子どもによって非常にまちまちである。

家庭保育と集団保育の論争においても、その一つの焦点は、乳児の就園時期である。Moore, R.S. と Moore, D.N. は彼らの著書『Better Late Than Early, 1975』において、八歳までは家庭教育のみを行なうのが望ましいと述べている。家庭は社会の核

(core)であり、多くの子どもにとっては、両親との正しい、愛情に満ちた一対一の関係から学ぶことが、将来のより大きな成長にとって重要であると、彼らは考えており、保育所や施設は、全体の二〇―二五%を占める何らかの問題児 (the handicapped, the disadvantaged, the deprived) や、経済的理由から、母親が働かなければならない子どもたちのためにやむをえず必要な存在であるとみなしている。

他方、保育所と家庭は、それぞれ質の異なる生活の場であって、子どもの発達にとってそれらはいずれも大切であるという理由で、乳児期からの集団保育を積極的に保障すべきだとする意見がある。(金田利子、一九七三)

特に金田は、乳児同志の関係が四ヵ月からはじまることを観察し、乳児保育において対人交渉が可能なことを示唆した。また、

仲間刺激を受けることによって、個々の子どもの発達（特に、課業と生活習慣の形成）は著しく、乳児期からの集団経験は、より充実した幼児期の前段階として、必要なプロセスであることを指摘している。

Moore の場合は、多少とも理想論に近い見解だといえる。彼らが述べるように、自分の子どもにも、豊富な生活経験を与え、かつ、確固たる教育観を持って、八歳になるまで、家庭で教育ができる両親は、実際にはほとんどいないのではないだろうか。子どもは、ある程度の年齢に達して、集団適応能力が発達してくると、集団の中に入れられるべきであろう。集団の中で、子どもたちは、両親が家庭で教えることのできない、様々の経験をするし、互いに刺激し合うことによって、より大きく成長するからである。

金田の場合は、おもに乳児保育の効果を強調しているが、乳幼児の集団適応能力という問題も考えられるべきであろう。集団保育を受けるといふことは、母親と長時間離れ、見知らぬ場所、見知らぬ人に出会うことを意味する。見知らぬ場所にひとり置かれた場合に生じる不安を容易に克服し、適応することができてこそはじめて集団保育の効果が生きてくるのである。不安が大きい場合には集団保育の経験が、将来のパーソナリティの発達にマ

イナスの影響を及ぼすことも考えられる。

集団保育の適齢期を知るために、実際の保育場面における観察研究（Ⅰ）と、実験場面における観察研究（Ⅱ）を行なった。まず、観察研究（Ⅰ）について述べよう。

Ⅰ、実際の保育場面における観察研究（Ⅰ）

新入園児の入団当初の不安と適応過程を調べるために、一九七五年四月から、一九七七年七月までの間、6ヵ月から36ヵ月までの保育所児43名と、36ヵ月から48ヵ月までの幼稚園児18名について観察した。

入園時にみられる不安反応は、母親との分離不安、見知らぬ場所や見知らぬ子どもや大人に対する不安であった。不安反応としては、「分離不安」と「観察者（見知らぬ人）への不安」、適応性反応としては「観察者（週一度、子どもたちに会うので、しだいに見知らぬ人ではなくなる）に対する愛着性」「保育所や幼稚園に対する適応性」の以上四つの局面からチェックリストによって観察した。

図—1は、入園3ヵ月間の分離不安、図—2は、保育所や幼稚園に対する適応性について、それぞれの変化を年齢別にあらわしたものである。いずれの場合も、得点化に際しては、行動としてあらわれる反応には3点、やや消極的で主に顔の表情にあらわれ

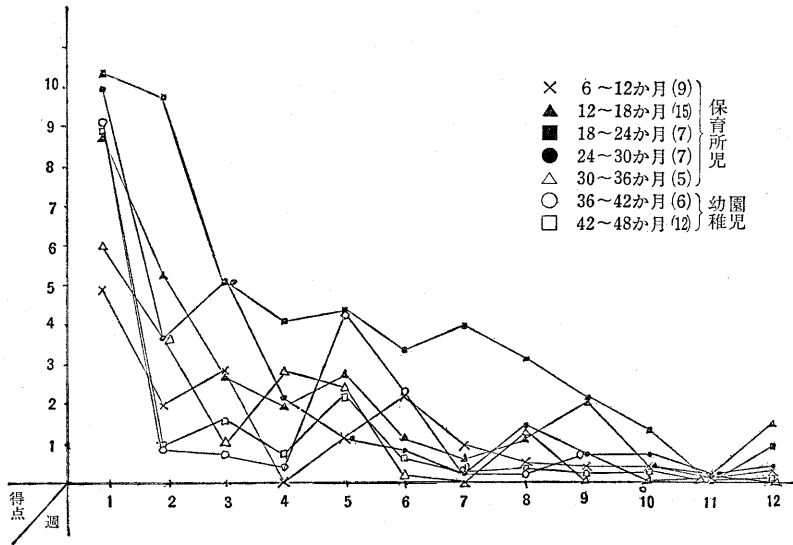


図1 分離不安反応の変化

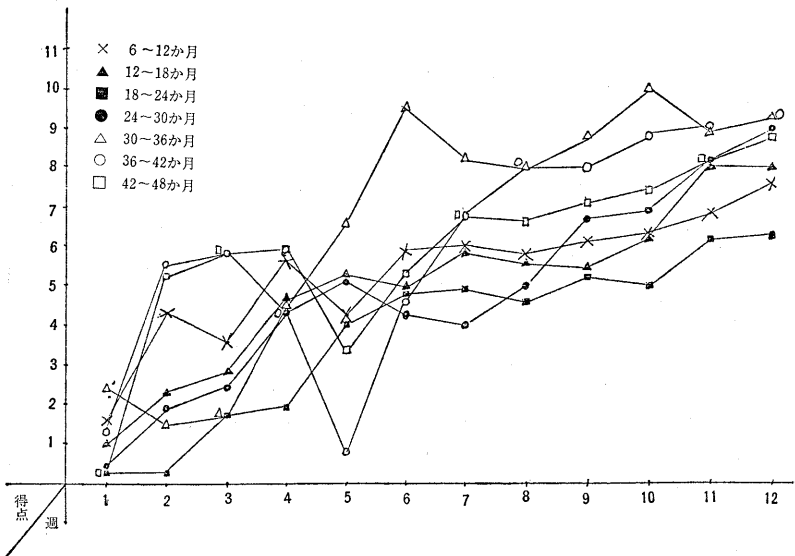


図2 保育所・幼稚園に対する適応性反応の変化

る反応には2点、消極的で反応があまりないものには1点を与えた。分離不安項目としては、「母を呼ぶ」「母を追う」「少し泣く」「強く泣く」に3点、「チック」「不安な表情」「指をくわえる」に1点をそれぞれ与えた。保育所や幼稚園に対する適応性項目としては、「入室してほほえむ」「楽しく積極的にあそぶ」に3点、「安定しておちついてゐる」「保母とつながりができる」に2点、「静かにあそぶ」に1点をそれぞれ与えた。

図—1において、分離不安の得点が、1以下になる時期を、一応乳幼児がおちつきをみせはじめた時期と解釈して、年齢別に調べてみると以下のとおりであった。すなわち、6—12ヵ月児は4週目、12—18ヵ月児は7週目、18—24ヵ月児は11週目、24—30ヵ月児は6週目、30—36ヵ月児は3週目、36—42ヵ月児と42—48ヵ月児は共に2週目であった。

図—3と図—4は、それぞれ、前半（1—6週）における分離不安得点と、後半（7—12週）における保育所や幼稚園における適応性得点の平均を年齢別に示したものである。1—6週目までの分離不安と、7—12週目までの適応性との間には、1%の有意性で負の相関関係が認められた。(r=-0.58)。すなわち、入所初期に不安の大きかったものは、2、3ヵ月たっても、よい適応を示さなかつたといえる。さらに、分離不安が最も強く、適応性

が最も弱いのは、18—24ヵ月児であり、次いで、12—18ヵ月児と24—30ヵ月児であった。6—12ヵ月児に関しては、分離不安得点も、適応性得点も低かつた。30—36ヵ月児、36—42ヵ月児、42—48ヵ月児はいずれも、年少児たちに比べて、分離不安得点は低く、適応性得点は高かつた。

以上の結果は、2歳半を境として、年長児は、母親との分離不安を短期間で克服して見知らぬ場所に早く適応するが、年少児は、遅いことを示している。特に、18—24ヵ月児に関して、適応が最も困難であつた。

G. Hatcher (一九五四) は、見知らぬ人につられて、他の見知らぬ子どもたちと共に、車でナースリースクールにつれていられる時に示す、2歳児(男児17名、女児14名)の適応について調べた。彼は、2歳児を年少と年長に分けて不安反応を調べたが、年長の方が年少よりも早く適応した。その理由として、彼は環境適応能力、状況理解能力が2歳半以後に発達することをあげた。この度の研究でもこのことを裏付ける結果が得られた。

「観察者への不安」と「観察者に対する愛着性」についても、「分離不安」や「保育所や幼稚園に対する適応性」と同じ手続で、年齢別に分析した。入園初期においては「見知らぬ人」であつた観察者も、週一回子どもたちと会っているうちに、しだいに「見

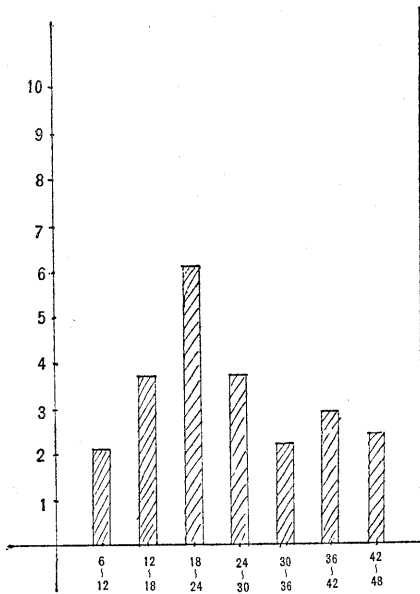


図3 前半の分離不安
得点の平均

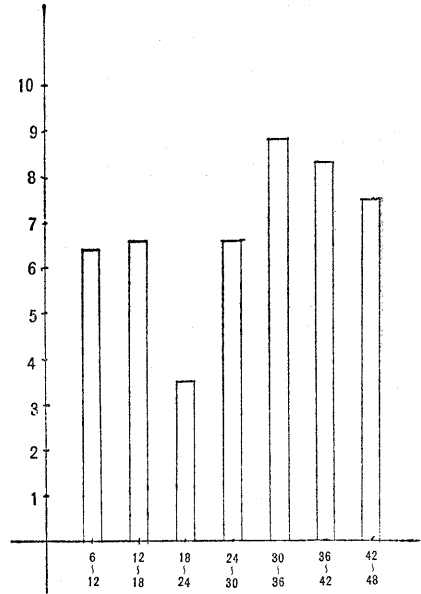


図4 後半の保育所・幼稚園に
対する適応性得点の平均

知らぬ人」ではなくなり、3ヵ月後には不安反応が消失して、愛着性が示されるようになった。観察者に対する反応の場合も、18ヵ月児が最も多くの不安を示し、愛着性が形成されにくい傾向がみられた。全体的傾向としては、入園後7週目から12週目にかけて、観察者に対する愛着性が顕著に示されるようになったが、その期間中、最も顕著であったのは、30ヵ月児であった。また、2歳を境に年長児の方が年少児よりも、愛着性を強く示した。

II 実験場面における観察研究 (II)

実際の保育場面で観察された不安反応についての年齢差をさらに確認することを目的として、一九七七年七月五日から八月一日まで、12ヵ月から53ヵ月までの保育所児56名(男児30名、女児26名)を対象に、見知らぬ場所への不安、見知らぬ人への不安、見知らぬ場所での一人残されることによる不安、について実験を行なった。

実験手続は以下のとおりである。

- (1) 被験児は、既知の実験者A(女性)と手をつないで、おもちやと大人用のいすがおいてあるプレイルーム入室する。
- (2) 実験者Aは「おもちやであそんでごらん」といって、被験児をあそぼせる。(3分間)

- (3) 実験者Aは、「ちょっとまってね」といって退出する。
- (4) 被験児は一人のこされる。(3分間)
- (5) 実験者B(男性、見知らぬ人)は入室する。「おはよう」と戸口で声をかけてほほえむ。
- (6) 実験者Bは、被験児にほほえみながら近づく。
- (7) 実験者Bは、被験児の右手をとって「こっちはいらっしやい」という。
- (8) 実験者Bは、「だっこしてあげよう」といって、被験児の両わきに手を入れる。
- (9) 実験者Bは、ひざの上に被験児をすわらせ、「ここ、すき」ときく。(3分間)
- (10) 実験者Bは、被験児をおろして退室する。
- (11) 被験児は一人のこされる。(3分間)
- (12) 実験者Aが入室する。戸口で「○○ちゃん、帰りましょう」と声をかける。
- これら12の場面を、一方視の窓を通して隣室から観察し、子どもの反応を積極的な適応反応〔5〕から、明確な不安反応〔1〕まで5段階評定した。
- 場面(4)と(1)の見知らぬ部屋に一人で残される場合の評定結果は図5に示されている。

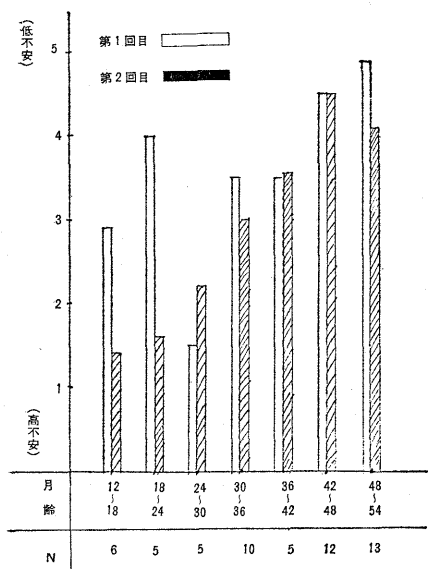


図5 見知らぬ部屋に1人で残される反応(保育所児のみ)

一回目に一人で残された場面(11)においては、年少児ほど不安を多く示している。しかも、一回目と二回目の差も、12〜18ヵ月児と18〜24ヵ月が著しく、年少児ほど、場面(1)から(10)までの不安場面において、容易に回復しにくいようなショックをうけることが明らかであった。実際、年齢が低いほど、どの場面においても不安が強く、2歳以下の被験児は、場面(11)においてほとんどが泣いた。場面(5)から(9)までの見知らぬ人(男)への不安場面における反応の平均を示したものは図6、場面(1)から(11)までの見知らぬ場所への不安場面における反

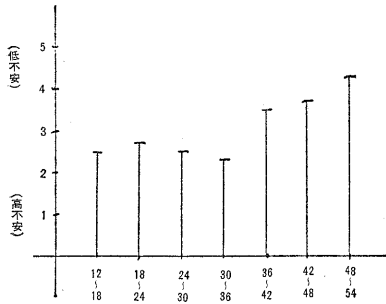


図6 見知らぬ人(男)に対する反応

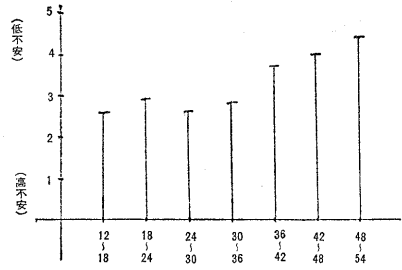


図7 見知らぬ場所に対する反応 (場面(1)~(11)までの平均)

応の平均を示したものは図7である。いずれも、3歳以下の被験児において、著しい不安反応がみられた。

「見知らぬ場所への不安」、「見知らぬ人への不安」、「見知らぬ場所に一人でのこされることによる不安」、の3つの不安は、年齢によって、その強度が著しく異なった。図8は、全場面の反応を年齢別にグラフで示したものである。見知らぬ人が退室する場面(10)から、一人でのこされる場面(11)への移りかわりにおいて、2歳半以下のものは、より大きな不安を示したが、2歳半以上のものはかえっておちつきを取り戻した。すなわち、2歳半以下の子どもたちは、見知らぬ人への不安よりも、見知らぬ場所に一人でのこされる不安の方がより強いといえる。実験者Bにしがみついて、どうしても離れまいと泣くものも多かった。それに反して、2歳半以上の子どもたちは、2歳半以下の子どもたちに比べて、全体的に不安も少なかった。そして、見知らぬ場所や、そこに一人でのこされることに対する不安よりも、見知らぬ人に対する不安の方がより強く示された。最初彼らは、一人で部屋にのこされると、喜んでおもちゃで遊んだり、探索をしたりして、実験者Aがそばにいた時よりもおちつきを示した。そして、実験者Bの入室で少し不安になるが、再び一人でのこされると、おちつきを取り戻し、すぐにおもちゃであそびはじめた。特に3

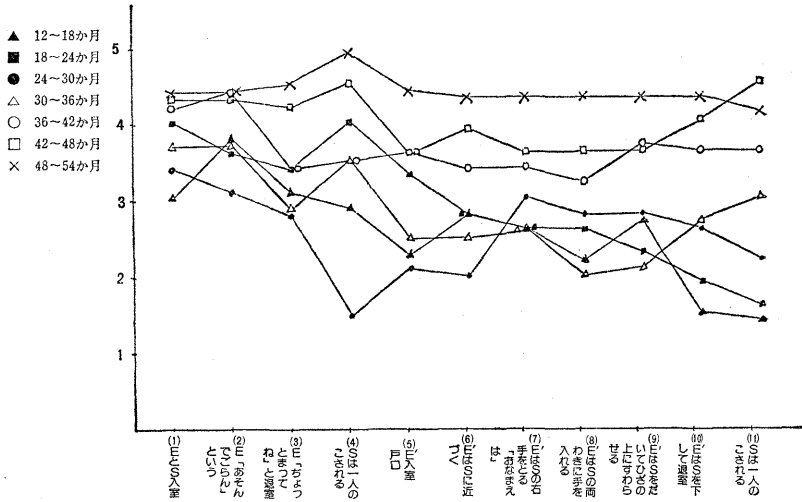


図8 見知らぬ場所における見知らぬ人への不安と、1人残されることの不安状況における反応

歳以上になると、はじめからおわりまで、そのすべての反応において、あまり大きな変化を示さなかった。

III 結論

以上の結果は、乳幼児の適応能力、不安克服能力の発達という立場から集団保育に参加する時期を考えた場合、現行の幼稚園における3歳就園が適切であることを裏付けるものであった。

実際の保育場面において、18〜24ヵ月児が最も多くの分離不安と適応困難を示したことや、やや弱いけれども、それと同様な傾向が6〜12ヵ月児、12〜18ヵ月児、24〜30ヵ月児にも見られたことは、実験場面において得られた、2歳半以下の乳幼児の著しい不安反応と共に、集団保育を受けるレディネスが、2歳半以下の乳幼児には、まだできていないことを示すものといえよう。入園後11週目位になってはじめて、おちつきをみせる18〜24ヵ月児に關しては、集団保育の効果よりも、むしろ長期間不安を経験させることによる障害の方が重大であろう。

(聖和女子大学)

Hちゃんの笑い

—— 保育随想 ——

本田 和子

Hは笑う 子どもたちに追いかけられて

Hは笑う 好きな友だちを追いかけて

Hの笑顔 それは 笑いが純粹に花開いた姿

哲学者たちが 様々に論じた

あらゆる笑いの理論を超えて

そこには 人間の笑いの原点がある

創造の営みの中で、

神が 人間に笑いを与え給うた日を

私どもは いま

感謝をこめて想うことが出来る

Hは笑う 顔一杯に

Hは笑う 体一杯で

Hの顔に笑いがある限り

この幼稚園の存在は不動であり

この保育の価値は 微動だもしない

ある幼稚園を見学したとき、私の観察ノートの一隅に、こんな言葉が書き連ねられた。詩などと言うものではない。一種の印象記録、一人の観察者として、「見たことのあかし」を、こんなスタイルで書き記した、と言うことであろうか。

Hは、いわゆる「障害児」と呼ばれる子どもであった。テストの示すところでは、精神年齢二歳教か月、殆んど言葉を用いることがないと言う。保育者の指示や働きかけは、わかるような、わからぬような、何となく子どもたちの間にいて、何となくフラフラしている、そんな子どもに見えた。

私の視野に、Hが鮮明な形で飛びこんできたのは、十時を少し過ぎた頃、すなわち、園内の子どもの遊びが、佳境に達した頃であった。私は、日ざかりの園庭に発生した大規模な水路作りに見入っていた。と、掘り進められた溝に、もっと水を流そうと、バケツを取りに駆けて行った一人の男児が、廊下の入り口で、危うく鉢合わせしかけたのが、Hであった。そのとき、Hの顔に、「パーッ」と笑いが広がった。そして、彼女は、そのまま、トコトコと逃げ出したのである。面白いことに、その男の子は、

笑い声を立てながら、Hを追いかけ始めた。体全体に笑いをさざ波だてながら、逃げるHと追う男の子。そんな関係が、突然、なぜ、ここで発生したのか、第三者的に位置する私には、わかりきれない。然し、二人にとって、それが大変面白く楽しい関係であり、とりわけ、Hにとっては、純粹に、笑いの湧き起こる体験であることだけは、疑う余地がなかった。

一時、逃走と追跡が続いた後に、ふと、関係が逆転した。追いかけていた男の子が身をひるがえして逃げ始めたのである。と、それに気付いたHは、体一杯の笑いを一きわ深くして、今度は、追いかける側に回った。トコトコと幼い足で追うH、時々ふり返っては、その間隔が広がり過ぎぬよう調整しながら逃げる男児。園庭一杯に広がったカラフルな子どもたちの群の中から、くつきりと、その二人の図柄が切り取られて、私の視界に、鮮明なしるしを刻み続けた。

Hの笑いは、そして笑いを共有する二人の関係は、まさに純粹な喜びの元型である。笑いという現象を説明しようとして、優越の理論、或いはコントラストの理論など、様々に考察が試みられている。然し、Hの笑いは、と言うより笑うHは、と言うべきであらうか、優越感のとりこになっているのでもないし、対比の妙

に興じているのではない。ただひたすら体の底から溢れてくる笑いで顔や手足をほころばせているのだ。そして、その笑いの泉は、他者と共にある喜び以外の何ものでもない。人と人が出会って、それが喜びであるような関係であるとき、人は、ひたすら、ただ笑うのであろう。そして、Hは、未だ赤ん坊の無垢の体現者でもあるがゆえに、その喜びをより直截に追い求めて、駆け出したのであった。Hがトコトコと逃げ走ったのは、「笑いの終了」、つまり瞬間に出会った二人の関係が終り、別々の他者に戻ることからの逃走だったのかも知れない。

いずれにしろ、私はここで、「人間が笑いを持っている」ということの意味を、改めてかみしめる機会を持たされた想いであった。



エリナー・ファージョンの作品の一つに、『海の赤んぼう^{*1}』という短篇がある。年とったばあやが、世話をしている末っ子のメアリ・マチルダに向けたお話という形をとったこの物語は、ばあやが少女だった日に、ただ一度の出会いを持った「永遠の赤んぼう」の、「永遠の笑い」について語っている。

ノーフォークの海辺に育った少女は、激しい嵐の去ったある夕方、常でない引き潮に誘われて、伝承の村を訪れる機会を持った。というのは、少女たちの間に、この海の先には、ノアの大洪水以来一つの村が沈んでいままも時折教会の鐘が聞こえてくる、という言い伝えが信じられていたのであった。潮の引いた砂浜を、金色に輝く砂粒をふんで、少女は駆けつけ駆ける。そして、砂浜のずつとずつと先に、金色のかたまりのような、輝く小さな村を見出したのであった。そこでは、かつての日さながらに、庭には花が咲き、木々には果実がみのっている、暖炉のやかんは湯気をたてているけれど、村人たちはすべて、深い眠りの中にある。そう、さながら、時間の流れをせき止めて、忘却から村を救おうとも言うのかのように、人々は、老いることも死ぬこともない眠りの中に身を浸して、誰一人、立ち上ろうとしない。

そんな中で、少女は、たった一人だけ、パッチリと目を開いた存在に出会う。それは、海のように青い目と、海の泡のように白い歯と、夕日を浴びた砂のように金色の髪を持った女の赤ん坊であった。しかも、赤ん坊は、少女を見ると、全身に笑いをみなぎらせてゆりかごの中に立ち上り、思わず両手を差し延べた少女の胸にびたつと抱きついてきた。そして、この赤ん坊、皆川美恵子^{*2}さんが作品論の中で、「ひまぎさまな海の姿で形容され」、「海の世

界と陸の世界との不思議なつながり」を象徴する「海の赤ちゃん」と解説した嬰兒は、少女の胸に抱かれて、「くっく」とあどけない笑い声をたてるのだった。

少女は、もう、赤ん坊から離れることが出来ない。再び満ちてきた潮に追われて、村に逃げ帰った少女の腕には、海の赤ん坊が、しっかりと抱かれていた。こうして、赤ん坊と少女との不思議な共存が始まる。この赤ん坊は、夜になっても眠らず、ミルクも飲まず、ただひたすら、少女に笑いかけてくる。「いい子ちゃん、目をつぶるの」と呼びかけても、子守唄を歌ってやっても、赤ん坊は笑うだけ、「あんた、いけない赤ん坊だね」と叱ってみても、赤ん坊は、ますます嬉しげに笑い続ける。そして、遂には、少女も笑い出してしまおうという、そんな一週間が続いたのであった。然し、七日めの夜のこと、月あかりの大地の中を白い雲のように泳いで来た女の人に抱かれて、海の赤ん坊は、少女の許を去った。その女が歌う「ねんねんよう、ねんねんよう」という歌声。それは砂の上に寄せる波のように静かで、いつの間にか、少女も深い眠りの中に誘い込まれてしまった。そして、目覚めた少女の傍に、その赤ん坊は、再び現われてはこない。

こうして、少女と海の赤ん坊との束の間の共存は終わった。然し、あの赤ん坊の笑い、ひたすら笑い続け、笑うことによつて

「生きてあること」を証したこの赤ん坊の存在は、少女にとって永遠のものとなった。再び、皆川さんの表現を借りるなら、「海の赤ちゃんとの出会いとわかれが、少女の、ばあやとしての一生を導き、」その少女を、「お話の上手な、子どもの心がよくわかる、どんな不思議なことでも信じられる人間」として、成長させたのであった。

このばあやは、皆川さんの指摘どおりに、作者であるファージョン自身であるかも知れない。そして、海の赤ん坊は、ファージョンが、その肉の腕に抱くことのなかった、但し、心の奥底に深く抱き続けた元型としての赤ん坊ではなかったろうか。内なる赤ん坊と、その全身に波立つ笑い、その笑いの波動のゆえに、ファージョンの生涯は常にもみずみずしかったのであろうし、彼女の生の炎は、常に黄金色に燃え続けたのであろう。終生を一人で生きた彼女は、恐らくは、孤独ではなかったに相違ない。共にある喜びを、笑いよつて証する「永遠の赤ん坊」を、いつも抱き続けていたのだから。



赤ん坊が笑い続けたとき、少女も笑わずにいらなかった。こ

ここでは、「なぜ、笑うか」という問いは、不要である。二人は、ただ、「共にある」から、「共にある喜び」を笑うのである。

Hの全身を波立たせる笑い、そしてそれを受けとめた男児の笑いは、まさに「共にあること」の喜びであった。「ちえおくれ」と呼ばれ、言語的思考の世界を充分には持ち得ないかも知れないとされるHの笑いは、それだけに純粋で元型さながらであろう。それゆえに、その笑いを追いかけるHの姿は、笑う人間の原点を示すのだ。

Hが、こうして、「友人たちの中に共に生きる日々」を喜び、生存の意義を全身で体験しているとしたり、私には、それだけで、この幼稚園の存在と、今日の保育の価値は、不動に思える。Hと、そしてあの男児を、ああやって笑わせた時間の流れは、そしてそれを培ってきた日々繰り返しは、恐らくは、他の子どもたちにとっても、意味深いものであったに相違ないのである。

たった一人の例から、すべてを推測するとは、余りにも科学性に欠ける行為だろうか。一匹の迷い羊を求めて、道をひき返した羊飼いの話が、聖書にある。それに対して、他の九十九匹の羊の安全をこそ考えるべきであろうという、合理主義者たちの批判が、注がれることがある。然し、言うまでもなく、この譬は、一

対九十九という数量的な対比が可能であるような次元に、位置してはいない。ただ一人をも失うことのない羊飼いでなければ、よき牧人とは言い得ず、仔羊たちを安全に守り導くことは不可能なのだ。

仮りに、教育効果の測定が数量的に試みられたとして、八〇パーセントの子どもが、八〇パーセントの満足を得ていると言う結果が、導き出されたとき、自身のありようを是とすることの出来る教育者がいるだろうか。満たされぬ二〇パーセントを追って、教育者の日々は安らかではないだろう。

教育の意味は、数量の次元を超えている。そして、その効果もまた、必ずしも、数量の次元のみのことからではない。多くの子どもたちを、ほとんどに過ごさせる毎日にもまして、ただ一人を、但し、充分に、燃焼させ充足させる瞬間にこそ、生命をかけるべきなのではないか。

私のこんな想いをよそに、走り疲れたHは、汗ばんだ顔を抑向けて、青ぎりの若葉のそよぎに、しばし、目を奪われていた。

* 1 E・ファージョン、石井桃子訳『ととったばあやのお話かご』
岩波書店 一九七〇・七

* 2 皆川美恵子「海の赤んぼうと私」『子どもの館』51号
福音館書店 一九七七・八

子どもと共なる日々



山本 秀子

今、我が娘は三歳五か月。この頃「自分は女の子」と感じ

はじめている。以前は抱き人形よりも赤レンジャーの人形をおぶって満足しており、二歳半頃は、友達から「祐ちゃん、(娘の名)おんな?」ときかれると、「ちがう、お姉ちゃん!」と怒りながらトンチンカンな返事をしていた。

でもこの頃、急にスカートとピンク色に凝り、「祐ちゃん、おんな。まきちゃん(友達の名)も。お母さんも」となり、男児向けのテレビ番組も、まず「男のものねえ」と言ってみる。そして、やっぱり熱心に見る。とても迷いを感じつ

つ……。そんな心の動きがわかり、何とも楽しい。

「我が子の見え方、感じ方」はこの三年半位の間に、いろいろ変ってきた。いくつかのエピソードとともに思い返してみたいと思う。

*

○哺乳瓶からコップへ

母乳をやめて、いやがる哺乳瓶を何とか使えるようになったのが八か月頃。保健所などの指導によると、一歳過ぎれば哺乳瓶はやめ、コップで飲ませよとのこと。それではと、コップを使うことを始めてみたが、ゴックンと飲み込むことがなかなかうまくいかない、コップに牛乳を入れても全く飲んでくれない。そんなこんなで、相変らず哺乳瓶を使っていた。あちこちから「もう哺乳瓶はやめたでしょうね？」と当然のことのようにいわれる。しかし、「何と

いっても、ゴロンと横になりゆったりしたい時に、瓶で飲むのは最高の楽しみ」という表情で瓶を使う彼女をみると、取り上げるのは何とも酷なのである。牛乳以外のものも喜んで食べるし、寝際には飲まないし、といくつかをおさえて、「一週間、泣かせてもらんなさい。とれますよ」といわれたことを頭の隅に押しやった。いくところまでいってみよう、親が気にしなければいい、と思いつ切った。

友達が家を覗いて、瓶で飲んでいる祐子を見、「赤ちゃんノ」という。「赤ちゃんじゃない」と抗戦。しかしシヨック

クだったのか、後でまた「祐ちゃん、赤ちゃんじゃない」といってみる。父親に「やめるノ」といわれ、隅っこでくわえていたり、瓶をみると「またお父さんにいわれるかな」といってみたり、彼女なりに、瓶をやめる心の準備をしているのが感じられる。一方、瓶も、先のゴムが噛み切れ、中のものがジョボジョボ出る状態になっていた。三歳間近、「もう使えないね」とコップにストローをつけてあげると、もう「ピン」といわなくなった。

子どもとの生活の各所で、その子どもと、どう対するか自分が問われる。やめた方がよいとわかっている、そこで泣かせて突き放すか、与えるか、それはもはや情の問題になってきて、子どもと対した自分との闘いの気がする。当然そこには、自分の育ってきた歴史もからんでくるし、父親のそれも入ってくる。「子どもを育てる」という一方的なことではなく、親も子もからみあって、「生き方を探っていく」ことが育児なのかもしれない。

今思うと、はじめの頃は随分、不必要なこともし、力みすぎてくたびれてもいた。『自分の子』という実感が何とも緊張したものだった。しかし、その無駄とも思える中から、自分に向っての反応に一層かわいさを感じ、自分がそ

の中にまぎこまれての感激を得てきた気がする。

そして今は、子どもとの生活にのめりこんだ感じができつつある。『自分の子』という実感が穏やかな、しかもはずみのあるものになってきている。そのきっかけになったのはこんなことからである。

○錯画から形あるものへ

我が子は三歳二か月頃まで、大人からみてよくわからぬ絵ばかり描いていた。そんな絵にも子どもなりの意味があるし、発達のプロセスとして存在すると頭でわかっているが、同年齢の子どもが形の整った絵を目の前で描くのを見ると、我が子はどうなっているのかしら、言葉で自分を表現することで事足りているからなのかしらなど、今思うと全く子どもにすまない感情にとらわれ、イライラしていた。

そんな時、本誌七六巻一二号の津守先生の「保育の体験と思索」を読み、頭を殴られる思いがした。「……形になる前に、子どもが自分から描く線がどんなに子どもの微妙な感情を表わしており……どんなに美しいものであるか

は、心を籠めて注意深く見るならばだれにでもわかる。

……」これによって、子どもの見え方が変わってきた。子どもに一步近づけた気がした。そして間もなく、我が子の絵が大人にもわかる形をとりはじめた。彼女は自分の中に溜めこんだものを一気に吐き出すように描き、傍の私も、その時見逃したらもう二度とみられぬという緊張で子どもをみつめるようになった。顔の形一つにも、心の中に何かがあり、それと少しでもずれると気にいらなかったり、反対に思うとおりに描けると、それまで張りつめていた緊張が、大仕事をした後のように解け、非常な満足となり、次への意欲に連なっている気がする。

この小さな身体のごとくに、そんな大きな力が潜んでいるのかと、改めて我が子を見直し、いとおしく思う。しかしこの感動は、日常の流れの中で、ともすると鈍り、子どもから離れたところで動いてしまう私だ。子どもの絵のみならず、行動のすべてを「心を籠めて」みつめられたら、どんなに親も子も幸せかと、津守先生の文を読み返し、子どもの絵を見直し、反省している。

春の陽をあびて冬眠からさめた様に、我が子は外へ向い、友達に向って心が拡がってきた。(安心しつつも、ちよっぴり寂しさを感じる)そこで、子どもが気楽に寄りつけるたまり場があまりに少ないことに気付いた。(私の周辺だけかもしれない)それには大きな理由がいくつもあるのだろうが、一番身近なところで、親自身の考え方もあげられると思う。汚れるから家に上げない。子どもと一緒に外に出ても立ってみるだけ。自分の子どもにだけ、注意の言葉だけをかけるなどなど。子どもと遊ぶお母さんが何と少ないのだろう。自分が子どもの中に入りこんで遊んで、反応が返ってきた時のあのうれしさを味わいたくないのだろうか。それとも知らないのだろうか。

狭いながらも遊べる場として我が家を提供しても、井戸端会議の親集団を気にしつつ、子ども達と泥をこねていると、「ああ、あの人は元幼稚園の先生だったからよ」という調子で処理されてしまう。そして私が子ども達をみて、親は立話を楽しむ格好になってしまう。親集団が育ってこそ、子ども集団も育つと思ひ直し、子どもに關する本をまわしてみたり、預った(自然そうだった格好)

子どもを返す時意識的に子どもの話をしてみたり……。

そして今、少しずつ雰囲気が変わってきているように思う。しかし改めて、母親が(父親が)子どもと遊ぶ、遊ぶお母さんになることが必要と感ずる。それは誰にでもできることであるはずだし、そうなることで、より楽しい育児ができ、女性の一生のうちで一番、母と子、他人との関わりの中で人間として豊かに成長できるチャンスと思う。そして、子どもを内側から感じ、そこを大切にしていける環境をつくりたいと強く思う。

これから先、幼稚園などの社会枠が身近になってくると、親も子も大きく変わってくると思う。その前の、すきまのない今を、教育的意味合云々を別にしても、存分に楽しんで子どもと共に生きていきたいと思う。このいとおしい時はもう二度とないのだから。



★海外文献紹介★

Enhancing the Quality of Life in Schools

Childhood Education

OCTOBER 1977

“Childhood Education”一九七七年十月号は、「学校での生活の本質を高めるために」をテーマに特集をくんでいる。その中から、オーラリー・マカーフエー女史による同名の論文「学校での生活の本質を高めるために」と、リリアン・G・カツ博士による「幼い子どもたちにとって基本とは何か」を主に紹介している。

*

マカーフエー女史はコロラド州デンバーのメトロポリタン州立大学の準教授である。この論文では実的な問題をとりあげている。子どもたちがいきいきと学び、成長し、また親も教師も子どもたちと共に喜んで生活できる学校は、ただその学校の玄関に立つだけで感覚的にわかるものだと述べ、それはいったい何なのかと問題を提示して論をすすめていく。

期待の変化

時代と共に学校に対する人々の期待が量・質ともに変化してきた。現在、両親や教師、子どものそれぞれの学校に対する期待は高くなっている。これは食欲のような基本的欲求が満足されてきたために、マスロー（一九六九年）が「高度要求」とよんだもの

——所屬自尊、自己実現、最善の成長の要求——に、エネルギーが放たれたからである。しかし、その期待をどうやって遂げるのか、私たちはしばしばわからなくなるのである。

理論的考察

生活の本質を「定義づけること」は不可能なことだろうが、次に掲げる様な観点から理解に近づくことができる。

- 環境的見通しから
- 経済的見通しから
- 社会的見通しから
- 心理学的見通しから
- 教育学的見通しから

価値の測れないものの価値づけ

教育にたずさわる私たちは、学校の生活の本質を高める特性を検証することができないだろうか。これらの「触れることのできないもの」は何なのか。現場の教師や生徒は、この問いに対して、具体的に答えている。

生活の本質の評価

最近、生活の本質を高めるものを「量」で表わそうとしている。明らかに限界はある。だが従来おこなわれてきた学校の評価——建物にかかった費用、授業参観日の親の出席率など——では、本質的な問いである「この実践が子どもやその家族、教師にどんな相違を生ずるか」を見落としてしまう。つまり、「学校の図書館には何冊の本があるか」と問うより、「何冊の本が子どもたちに貸出されているか」と問う方がその本質がわかるのである。学校の生活の本質だけでなく、「家族」や「教師」の生活の本質はどうだろうか。

まとめ

日常、学校でおきていることと「生活の本質」とはかけ離れているように思える。しかし、一分一分、一日一日の活動や感情が、私たちの生活を成していく。私たちは毎日の生活をどうしたのか。必要な変化をどうもたらずのか。何を評価したいのか。最も価値のあるものは何か生活の本質のいくつかの要素は学校の影響下にあるだろう。ここで変えられるものはあるはずである。こんにち私たちは、より本質的な生活を導く論点を定めるために働くことができる。

学校は子どもを教育する場であるが、そこで子どもたちに何を

教育していきたいのかが問題となる。日本では「ゆとりのある生活」を目標として文部省の指導要領が改訂された。教育にたずさわる私たちは、子どもや親、そして教師が本当にいきいきと学校で生活できるようにするにはどうしたらよいのかを常に考えなければならぬ。

○

次に、イリノイ大学の教授、リリアン・G・カッツによる「幼稚園子どもにとって基本とは何か」を紹介しよう。これはカッツ博士が第十四回オーストラリア幼児教育国際会議で発表したものである。

「子どもひとりひとりが、健全な発達のためにしなければならぬことは何か」という問題を提示し、相互に関連のある七つの観点から論じている。

一、幼い子どもは安全であると感じなければならない。——人を愛し、関係をもち、安全を体験することは、単に愛されることから始まるのではなく、ほどよく（最高ではない）愛されていると感じ、求められていると感じ、たいせつだと感じる、ことからである。安全は、単に人々が暖かく反応するのではなく、実際に、反応するの信じさせることで育っていく。

二、ひとりひとりの子どもは適当な（過度ではない）自尊心を

もたなければならぬ。——自尊心はクライテリアに対する自分の評価からできていく。子どもの集団の安寧を守るというクライテリアを子どもたちに獲得させたい。子どもたちがどこにいようと、豊かであろうと貧しくとも、ハンディキャップをおついでようと、正常であっても、成長していく間ずっと、最適な自尊心をもたなければならぬ。

三、ひとりひとりの子どもは、生きる価値があり、適度に満足し、おもしろく、ほんものとして自分の生活を感じ、体験しなければならぬ。——子どもたちは成長していく間中、自分たちの生活が現実であつてたしかなものであり、家にいようと学校にいようと、デイ・ケア・センターにいようと、生きて満足する価値があると感じられるはずである。

四、幼い子どもは、自分たちの体験の理解を助けてくれるおとなや年長の子どもの求めている。——もし私たちが幼い子どもの体験の理解をすすめて、発達するのを助けるなら、それらの理解が何なのかを、あからさまにしなければならぬ。私たちが行動したり、子どもたちが準備された活動をしたりする時に生ずるありのままのことが、私たちに見えなくなるものや、計画に向つて生ずる活動についてよい決定を授けてくれる。

五、幼い子どもには、自分たちのより大きな体験や、知識、知

恵によって、自分たちのものである権威を引き受けるおとながいなければならぬ。——権威主義のおとなは、暖かき、援助、勇氣、適切な説明で、幼い子どもの生活に重要な力を働かせる。

また、子どもを尊敬して扱う。最適の力と最適の暖かさの組み合わせが、子どもたちがどこに、いようと背景がなんであろうと、成長する間、子どもを助ける。

六、幼い子どもは、私たちがかれらに獲得させたい個人的な性質の模範となるおとなや年長の子どもたちとの最適な結合を求めている。——子どもたちの環境を見直し、彼らがどのくらいの範囲にいる人々を模範として関係をもつか、また、どのくらいの範囲で、私たちが育てたい性質の全く反対の人々に気がつくのかと問うている。

七、子どもは、行動する価値とは何か、持つ価値とは何か、知る価値とは何か、そして気にかける価値とは何かを喜んで主張するおとなとの関係や体験を求めている。——私たちは、やる価値のある生活の二者択一の定義を重んじる能力を育てなければならぬ。勇氣や信念をもって主張すれば、私たちが他の人々の価値と同様に自分たちの価値を尊敬する十分な自尊心をもち、思考し、世話をする個人として、若者はたやすく見てくれるだろう。このように思考し、世話をするおとなは、子どもたちがどこにい

ようと、どこからしようと、発達を通して、子どもには重要であるように思える。

カツ博士の論文からはとりたてて新しい事柄を見出せない。日常、どこでも考えられていそうなことである。しかし、幼い子どもにとって、最もたいせつなのはこれらのことなのだ、今一度、改めて考え直すことができる。

また、ジェームズ・L・ハイムス二世は、「大統領と教師について」で、大統領と教師を対比させ、三つの型にわけて論じている。

一つは、人々(子ども)に近づいていく型、二つは、自分を信賴し支持する人々子どもを求める型、三つには、目標を高くかかげ、これを保つ型である。合衆国の歴代の著名な大統領と教室内の大統領である教師とを対比させたところが、興味深く読むことができる。

(角能清美)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——（十九）

津 守 真

未来と過去とに連なる子どもの行為

——四歳児三学期の描画作品から考える

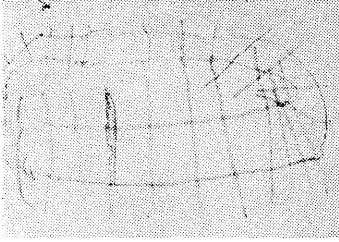
私の手もとにある、四歳児三学期の子どもの描画作品の多くは、形としてととのったものではないし、目立つものでもない。すぐには意味のとりにくいものも多い。しかし、よく見てみると、そこには、ひとりひとりの子どもはかなり永続的な性質の一部があらわれているように思う。そのときに子どもが必要を感じたり、考えついたものが描かれるだけでなく、むしろ、子どもなりに実現したいと思っている心の動きが表現されている。

四歳児のそのときにも、子どもの自発的行為に肯定的に接すれば、具体的行為の底に、子どもの心の動きを感じとることができ、しかしそれは、ずっと後に、もっと十分に実現されてから見かえすと、一層はつきりする。四歳児のときに、すでに未来に向けて望み見ている自分自身の傾向があらわれているのであろうが、もちろん、それは子ども自身によって、幼い段階で明瞭にとらえられているとはいえないし、また成人するまで記憶されいるとも言えない。本人によってそれがとらえられるのは、ずっと後になって、これも最初の具体的契機などは忘れ去られてしまつて、遙か以前からつづいているものとして仄かにとらえられるに過ぎないのである。

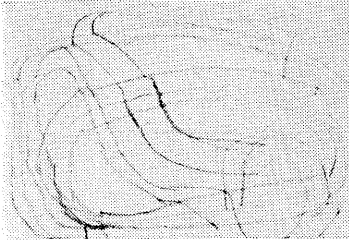
自分自身のことではないとなると、多分とか、恐らくとか、多くの留保をしつつ語りねばならないが、ある年月にわたって、未
来が現在になり、過去になるのを見てくると、幼時期のある時点
のことが、後にまでつづく個人の傾向を示していると思えること
が少なからずあるように思える。四歳児の描画について、このよ
うな例に気付いたので、次に、いくつかの例について述べようと
思う。

写真(1)―(3)は、四歳児のYが、家庭で描いたものである。

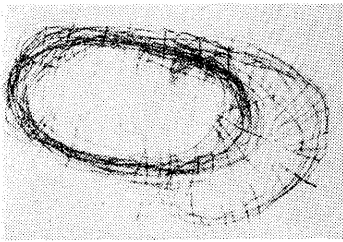
私は長い間、この描写の意味をはかりかねていた。数年たって



▲写真 1



▲写真 2



▲写真 3

から、この描画をかいたころの次のような記録に気が付き、その
ことからこの描画のことを考え直してみた。

一月十五日

子どもたちは、母親に、毛糸でミータンヤアドの帽子などを編
んでもらい、そのまわりでうらうらとおしゃべりをしている。

P 「お母ちゃま、どうして、そんなにあみものができるの？
中学かなんかで習ったの？」

母 「自分で考えるのよ」

P 「お母さんに教えてもらったり？」

母 「お友だちも教えてくれるし、本よむとすぐに分るようになるの」

Y は、さっきからずっと、編棒と毛糸を両手でぐるぐるやっていたが、「あら、こんなのができた——」と見せる。

子どもたちは、母親のまわりに集まって、毛糸編みを見ながらおしゃべりしている。

P 「ぬいぐるみつくれた」と私にみせる。「プープちゃんのおふとんできた。こんどはエプロン作ろう」

Y は、針を出してもらい、針をつけている。A は、手でくさりあみをしている。もう、一時間半くらいつづいている。(Y、五

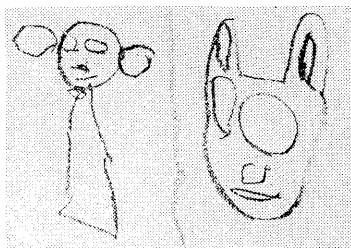
歳二ヵ月、P、七歳〇ヵ月、A、八歳三ヵ月)

Y はあまり口をきかないが、両手をくりくり動かしているうちに、編棒と毛糸で何かを作ってしまう。こうやって、母親のまわりで毛糸をいじっていることはしばしばあった。その後、Y は、ひきつづいてもっと大きくなるまで、両手を使って、手で何かを作ることが好きである。手で考えていると言っているような場面にはしばしばぶつかる。

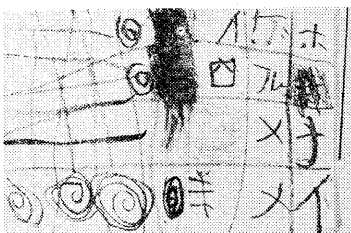
さて、こういう背景のもとに、写真(1)―(3)の描画をみると、これは、両手をくりくり動かして、編棒で毛糸を編んでいる触運動の感覚をあらわしていると思う。四歳児の三期のころには、編物と言っても、そのでき上りは、毛糸をからみあわせた小さなかたまりにすぎない。しかし、ここで編み棒を動かしながら両手の指をからみ合わせる触運動のイメージは、この後ずっと、この子どもの生活の重要な位置を占めている。その出発点の、これから次第に実現されてゆこうとするときの、原初的なイメージがここにあらわれている。

写真(4)、(5)に示すのは、別の子どもの四歳三学期の描画である。マジックやクレヨンで紙面を二つに分割し、また更にいくつにも分割して、その中に異なったものを描く。無雑作に、何枚も描かれるので、この時点では、ほとんど無意味なようにみえる。ところが、ひきつづいてこの子どもの描画をみてゆくと、ひとつの画面の中に、いくつもの異なる空間がつけられて、繊細で多面的な動きのある全体を作り上げてゆく。これについては、ここではこれ以上述べないけれども、無雑作な分割とみえる四歳児のこの段階での描画は、その初期のあらわれと思う。

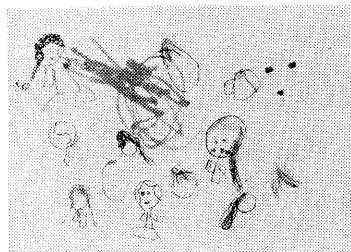
附属の幼稚園で、丁度同じころの時期に、電車の切符や乗換案内



▲写真4



▲写真5



▲写真6

内を作っている子どもが何人もいる。その中のある子どもは、画用紙に何本も線をひいて、いろいろと字や記号をかきこんで、それを作ることに汽車ごっこ重要な部分があるみたいである。それがその子どもの中でどのように展開してゆくかは、まだ分らない。形の上では、この写真の描画に類似しているので、異質な空間の分割と構成がこの子どもの心の動きの中にあるのかもしれない。しかし、未来が未知な段階では、ただ一つの可能性として、楽しみに望み見るのとどまる。その子どもの心の中に動く原初的なイメージを、子ども自身が追い求め、明瞭にしてゆくことにより、その子どもにふさわしい未来が実現されてゆくのであるから。

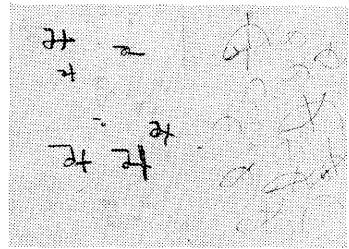
写真⑥は、四歳三学期にAが家庭でかいたものである。写真⑥では、人の横顔をかこうとし、自分の思うようにかけなくて、何度もかきなおす。このことから、Aの描くものには、かきかけでやめるものが多くなる。また、うまくかけるように、同じものをいくつもかくことが多くなる。人の横顔、髪型、ハイヒールの靴など、そのときには、何日間も、同じものをかいて自分で練習している。自分の心の中に、こういうものをかきたいという理想が生れ、それに近づくように努力し、練習する。

このことは、かならずしも、四歳になってはじまったことではない。もっと小さいときから、何か自分の気にいる状態が心に描

かれて、それに達しないために、泣きわめいたりすると思われることがしばしばあった。それが、描画の上で、何度もかきなおしたり、自分の思うようになるまでいくつもかいたりするようになるのが、このころであるといえよう。丁度同じころに、字を書くことに興味をもちはじめたが、おとなに、うるさいほど何度もきいて、同じ字を書きならべる。(写真⑦)「ゆ? おゆのゆ? それじゃ、あたし おゆてかけるわ。いくつも同じ字を書く。次にわをかいて、あのね、は、でもわってよめるんだよ」。字に興味をもちはじめたときには、こうして自分で練習し、自分でできるようになる。

自分の心の中に理想が生れると、自分で努力し練習するという傾向は、この後もずっと続き、いろいろの形であらわれる。幼稚園を卒業するころに、この同じ子どもが、食卓の会話の中で、ふと次のようなことをいう。「あたしってね、いつも、はじめはうまくできないけれど、努力しているうちにできるようになるよ。なわとびだって、はじめはできなかったでしょ」「こうした心の動きは、だれにも共通にあるものであるが、ある子どもにはその傾向が時に強く、また永続的で、その人の性質といえるほどのものになるであろう。

附属幼稚園で、四歳児の三学期に、これに似た作品に出会うと



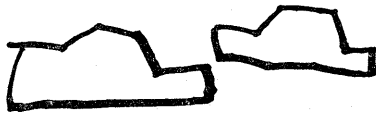
▲写真 7

き、それはそのときのことであるのだけでも、その子どもにとっては、永続的な意味をもつ重要なものであるかもしれないと思う。

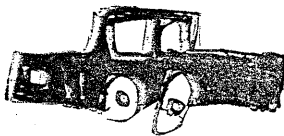
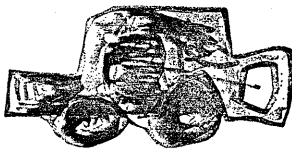
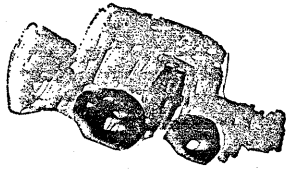
二月十四日

戸外は特別に寒く、砂場で遊んでいた子どもたちも、じきに部屋の中に入ってくる。

Sは、私に自動車をかいてはしがる。こういうとき、たいがい、私は子どもにもかける程度のをかく。子どもの理想どお



▲写真 8



▲写真 9

りのものをかこうとすると、子どもの理想とも違った、子どもには手の負えないものができてしまいがちになるからである。私は簡単な自動車をゆっくりかきはじめる。Sは、そうじゃないとかいろいろ言うが、結局、自分でかきはじめる。かきかけては、うまくいかないと言う。(写真⑧) 私は傍にいて、かっこいいのができてきたな、など言ううちに、何度もかき損じながら、自動車がかき上り、得意な様子である。私は切り抜いてやると、次々に自動車をかき、自分で切り抜く。(写真⑨)

Dが画用紙を小さく切って、二つ折りにし、刻みをいれた小さ

な飛行機をもってくる。二つ折りの小さな飛行機が二つ、二重に滑りこむようになっていて、うまく考えて作ってある。Dは、三歳のときから、四歳児の二期期まで、先生についてまわったり、うろうろしていることが多かった子どもである。四歳の三期期になってから、室内で、自動車などこまかいものを、自分で考えて丹念に作って、自信をもって持ってくる。この日の飛行機もその類いのものであった。

私は椅子にかけて、画用紙のきれはしを切っていると、Hが、お金作ってと言ってくる。丸く切ってお金を作る。A、K、M

が、先生に作ってもらったあめや、自分の作ったあめをもってきて私に見せるので、私はたべる。Kが私の膝に坐り、私に何をつくっているのかきくので、弁当箱だというとき、Kは、バナナとか人参とかいろいろのものを切って、弁当箱の中にいれる。こうして、みんなでごたごた作っているうちに昼食になる。

あとで気が付いたことであるが、Kは、画用紙で作った弁当箱を、部屋の片隅のプレヤーの下の見えないところにいれていた。

写真(8)に示した、途中まで描いて止めた、Sの自動車の輪廓の描画は、Aの場合と同様に、自分の理想に近づくように努力し、練習している過程とみることができよう。しかし、それだけではないことは、これを描いた状況からよみとることができよう。Sは、自分の理想としている自動車があるけれども、最初は自分で描こうとしない。まずおとなにたのむ。それから自分で描きはじめるが、自分の描いたものを批難されるのをおそれているかの如くである。それで、かきかけでやめて次をかく。こうしていくつもかいているうちに、自分の描くものが批判の対象になるのではないとわかり、自分の理想に向って、自信をもって歩みはじめる。

この点で、Sのかき損いの描画は、過去と未来とに関連してい

る。輪廓をかきはじめるや否や、それではいけないという強迫観念が生じて、途中でやめる。それはS自身の過去の体験の中で、自分が手をつけたものを批判され、批難されることが多く、それを恐れることからきているのではないかと思う。

Sの心の中にあつて自らの自発的行為を批判している存在から脱出することができたとき、Sは自分の理想とするものに向って歩きはじめることができた。そのときには、自分の氣にいるものができるまで、いくつもかきかえるのは、楽しい努力となるであろう。

こういう子どもの場合には、心の中に理想が生み出されて、それが実現するまでには、自分自身の中の何物かを乗り越え、また、努力と練習を重ねてゆくことが心の主要なテーマとなつていると言つてよいであろう。こういう子どもは、成長するにつれて、理想が実現するまでに、長い努力の期間をもちこたえねばならないことが多くなるであろう。その期間は、焦ったり、悩んだり、迷ったりすることも多く、周囲のおとなにとっては、その感情の起伏だけが見えて、本人の心の中に、原動力となる理想があることすら見えなくなることもある。そのときに、周囲のおとなは、現在を、過去と未来に連なるものとしてとらえることにより、もっと大きな視野の中でその子どもとつき合つてゆくことができる。

るであろう。

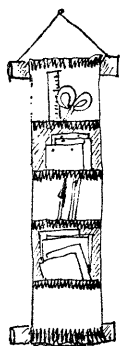
Dは、二つ折りの小さな飛行機を丹念に作る。Dは最近自分身の本領にゆき当たつたみたいである。そのくらい、何かを作つているときのDはいきいきしている。私はDに関する観察と感想を担当の先生に話したら、そうでしょうと、先生は目を輝やかして語つた。先生とDの間には、相応するものがあつたのだと思う。子どもの中の心の動きを、周囲のおとなが見出して、それとつき合つてゆくことにより、子どもは成長してゆくのであると思う。

Kは、画用紙の小さな弁当箱の中に小さな物を刻んでいれることに興味をもつ。小さな物や内部のイメージは、Kにとっては親しみのあるイメージなのである。

幼児期にある、これらの子どもの未来は、まだかくされている。私共は、この子どもたちの未来の具体的なことについては何も言うことはできない。けれども、未来について、全く何も望み見ることができないわけではない。私共は、子どもたちが自分らしく充実して生き、遊ぶことができるようにしてやることので

き、その中でその子どもらしい心の動きをとらえることができ。それは形をかえて、未来にひきつがれ、成長と共に磨かれてゆくものであると思う。私共は、それを望み見つつ、現在を楽しんでつき合つてゆくのである。

(つづく)



地方の小さな都市で、五十年前に小さな幼稚園を創られたおばあさんをお訪ねした。八十歳をこえても、元気に子どもたちの中に交っておられ、子どもの中の楽しいはなしをいろいろと伺った。むかしから蚕を飼っていて、子どもたちは蚕が繭になるのを見ていて、かいこさんは寂しかりうからと、小さな人形や玩具をそのわきにいれてあげるはなしなど、

かいこを友だちのように思う幼児の気持ちを、そのままに受取って楽しんでおられた。その繭のそばに小さな玩具を入れた箱を、捨てがたくて戸棚の中にしてもらわれて、出して見せて頂いた。海辺の漁師町であるのに、幼稚園から子どもが帰るとき、ビニールの袋に砂場の砂をいれて持って帰る子どもが最近増えてきたとのことだった。「何にするの?」とたずねると、家に帰ると砂がないからと子どもたちは答えるのだという。砂だけでなく、水をビニール袋にいれて持って

帰る子どももいるとのこと。「うちではお水をやるとママに叱られるから」と老園長の観察眼はなかなか鋭い。

この幼稚園の周囲に、最近、五、六百人の園児を持つ幼稚園がいくつかできたそうである。いずれもスクールバスで一時間以上もまわって、子どもを乗せてくる。それに対して、老園長は、幼稚園に到着するまでに子どもが疲れてしまうようなスクールバスは絶対に使いませんと断固と言われた。まわりの幼稚園は、時間割で区切って歌をうたったり、絵をかかせたりしているけれど、幼稚園は子どもが楽しく遊ぶところでしょう。自分とはたとえ子どもが五十人に減っても、本当の幼稚園の道を歩みたいと、静かななしの中に決意を語られた。

日本國中、津々浦々、幼稚園は子ども党の人たちによって支えられてきた。これからも、幼稚園から子ども党が跡を絶たぬことを信じている。

(津守 真)

幼児の教育 第七十七巻第九号

九月号 © 定価二二〇円

昭和五十三年八月二十五日 印刷
昭和五十三年九月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

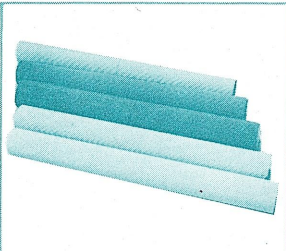
お役にたつ
フレーベル館の

2学期以降にお使いになる用品を豊富に取揃えました。

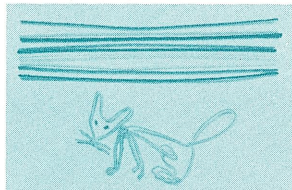
2学期用品



- 壁面セット(10色入)
軽くて何にでも貼れる粘着のり付壁
面材料 1,500円

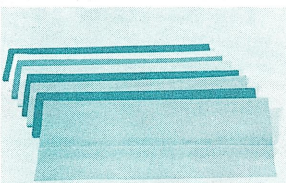


- 色段ボール(4色セット)
丸みのある立体造形に欠かせない素
材 2,800円

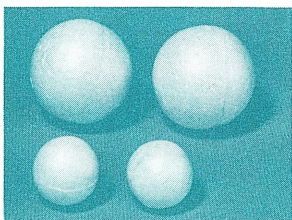
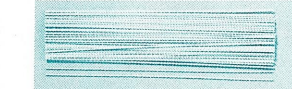


- カラーモール(10色セット・1色100本)
特殊加工を施した色落ちしないモー
ル 3,500円
- 竹ヒゴ(200本セット)長さ30cm・1,600円

★
作品例



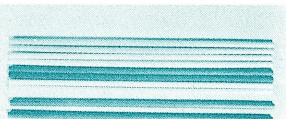
- クレヨン紙(8色セット)
人形、造花などの手芸用紙。食品用
色素染 1,600円



- 発泡ボール
●直径6cm- 50個入セット 1,600円
●直径3cm-100個入セット 1,200円
人形の頭や乗り物づくりに便利な発泡球



- 色画用紙(20色・1色100枚入)
紙工作、描画に最適の四つ切り高級
グtent紙 1,800~2,000円



- ニューボール(5色セット・250本入)
キビガラにかわる新しい造形用発泡
素材 4,500円



- 不織布(2本セット)
何でも着色できる特殊/VLP布口
ール巻 5,000円



★
ニューボールとカラ
ールを
を使った作品例



- 両面おりがみ(10種・1,000枚)
色の変化を楽しめる両面色違いの新
折り紙 3,500円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課 ☎(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館



創刊50年記念出版

復刻

今、甦える保育絵本の原点。

半世紀にわたる保育絵本の歴史の精髓を、時を超え感動も新たに再現

キンダーブック

フレーベル館創業70年を記念する事業として

わが国における絵本の歴史のなかでも、とりわけ保育絵本の歴史は重厚です。

昭和2年、はじめて「キンダーブック」がこの世に生まれてからすでに50年を数えるに至っています。この永い歴史の中から、価値ある戦前の保育絵本を復刻しました。

○50年にわたる出版の歴史の中で、戦前の証人たる40冊を厳選。

○紙質、活字、絵画、造本など、すべてを細心の配慮で復元。

○風物・歴史の資料としてだけでなく、生活や思想の流れまでも知らせる貴重な記録。

○思い出の愛蔵文庫として、教育者・絵本愛好者の資料としての生きた記録です。

○全4巻（各巻10冊・計40冊）

第一巻・昭和3年～5年の中から10冊

第二巻・昭和6年～8年の中から10冊

第三巻・昭和9年～12年の中から10冊

第四巻・昭和13年～16年の中から10冊

○特別記念

キンダーブック創刊号（昭和2年発行）

ツバメノオウチ創刊号（昭和7年発行）

定 価 48,000 円

（昭和53年8月末日までに予約お申し込みの方は、予約特価45,000円です。）

○お申し込みまたはお問い合わせ先

フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または
本社営業課（03）292-7781代にお申し込みください。

フレーベル館